



あきたの文芸
第55集

「あきたの文芸」

第五十五集

あきたの文芸 第55集 目次

●小説・評論

奨励賞
グリーン賞

暖鳥ぬくめどり

田口 奈央子

坂本 愛子

●詩

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
奨励賞
入選
グリーン賞

ホリゾントライト

草の岬

森の書店

ラインの黄金

いしざとゆうき

金乃華穂

原田 さゆり

深町 一夫

鈴木 修一

小林 康子

西村 慧亮

鈴木 敏男

大塚 莉々

●短歌

最優秀賞
奨励賞
奨励賞
奨励賞
入選

沙羅の花落つ

夜半に目覚めて

媼

みどりご来るきた

森野 奈津

佐々木 鏡子

高田 勝彦

佐々木 ヨリ子

蓬田 真弓

高橋 岑夫

熊谷 すが子

小林 康子

浅利 夏音

赤倉 聖来

グリーン賞

高橋那尚

俳句

最優秀賞

奨励賞

奨励賞

奨励賞

入選

信仰の園

記念樹の桜

夏の家

通り土間

種村 聖巴子

石郷岡 由紀

浅田 英夫

佐々木 友凜

佐々木 成

石井 美智子

三浦 善隆

唐 一平

佐々木 亮子

七尾 理絵子

山田 草人

石田 幸栄

三浦 静佳

津谷 郁哉

川柳

最優秀賞

奨励賞

奨励賞

奨励賞

入選

いい眠り

一粒の種

恋の数式

愛の果て

鈴木 明夫

菅原 浩洋

川越 柳伸

澤田 幸代

小松 隆義

加藤 円心

三浦 千両

エッセイ

奨励賞

奨励賞

奨励賞

奨励賞

グリーン賞

栗の花

竹の子

小さな旅、心の色を微笑みに

夜のしじまで

佐藤 奈央

高橋 文子

佐藤 則英

畠山 信英

阿部 美和子

●最優秀賞受賞のことば

●選評

小説・評論	大原 かわり	山崎 義光	加賀谷 真澄
詩	佐々木 久春	成田 豊人	寺田 和子
短歌	福岡 勢子	伊藤 寛雄	山中 律雄
俳句	斎藤 淳子	片倉 俊秀	山本 公平
川柳	宮腰 流木	柴田 政幸	藤咲 公平
エッセイ	柴山 芳隆	武田 幹夫	中村 寿

●あきた県民文化芸術祭2022「あきたの文芸」応募状況

●あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

小說・評論

小説・評論

奨励賞 暖鳥

由利本莊市 坂本愛子

狗鷲

鋭い羽音が溪谷を切り裂いた。

屋根のように柵を覆うアカマツの枝から雪のかたまりがひとつ、たまりかねたように落ちていった。

イヌワシが狩りから戻ったのだ。

つかんでいた野ウサギはイヌワシの鋭い爪から放たれたが、その眼は凍った湖のように何も映していない。雪原に風切り羽根の音が響いた次の瞬間には、ウサギの頸はイヌワシの握力に耐えきれず、あり得ない角度にねじれていた。苦痛も驚愕も窺えない、静かに澄み切った眼だった。

さて、とイヌワシは独り言ちた。

「獲物はこれでいいが、暖鳥が要るな」

その独立峰の裾野の西の果ては、海にまで及んでいる。

北西の季節風が峰を駆けあがるときに降らせる雪は、樹林帯を覆いつくし、火山性の荒々しい山嶺をまどかな円錐に変えていた。ただ、数万年前の噴火による山体崩壊の跡である溪谷だけが、三日月型に鋭く切れ込んで、白一色の山肌にうす青い影を落としていく。一年を通して吹きつける海風のせいで、森全体が東にかしいでいるが、溪谷の西側の斜面だけは、山体が壁の役目を果たすため、巨樹の屹立する豊かな森であった。淵に潜むイワナや昆虫の幼生のほかは、空を往く者のみに許された世界である。イヌワシはその世界を統べる、唯一の者だった。

断崖の中腹に、アカマツの巨木が天を指している。成長の過程で落雷か雪折れかによって幹の半ばが真つ二つに裂けたものの、生き延びてさらに年古りた老木である。その裂け目の大きな洞がイヌワシの棲である。二つに裂けた幹の、片方は洞の上に天蓋のように枝を拡げ、もう一方は溪谷の上に張り出してイヌワシの見晴らし台となっていた。

このところ、闇に支配される時間が短くなつた。

山頂の空が明るみ始めるのも、確実に早くなりつつあった。

ここ数日、西風ははたりと止み、日差しが力を得つつある。山全体を覆う深い雪の下では、いのちが目覚め、身じろぎを始める気配があつた。はるか下界のヒトの領域でも、子どもたちの甲高い声や暮らしの音が、雪原を渡つて切れ切れに届くことがある。雪はあらゆるものを覆い、眠らせるが、そこから漏れ出た音は、雪原を滑るかのように不思議なほど遠くまで届くのだつた。

だがこれがほんとうの春の兆しではないことを、イヌワシは長い経験から知っている。

北西から侵入し、世界を覆いつくす「冬」は、時が来れば南風に追われるように去っていくが、その攻防の果てに、一度は去つたかに見せて勢いを取り戻すことがある。冬の戻りは昼も夜もなく荒れ狂う猛吹雪と、あらゆるものを凍らせる寒気で世界を蹂躪し、「春」を思うことすら許さない。それに耐えた者だけが、ほんとうの春を迎えることができるのである。

このとろりと動かない空気は、「冬」が去ると見せかけて、好機を窺っているしるしである。今夜は荒れる、とイヌワシは確信した。うかつに穴から出てきた野ウサギを苦もなく仕留め、食糧は確保した。だがこの冬は、かつてないからだの衰えを痛感するようになった。足の冷えに、深更に目覚めることもあった。

「暖鳥が要るな」

とイヌワシはもう一度独り言ちた。

バサバサーツという音とともに、転がる感覚。

目覚めたのは音によってだったか、回転したからだが思い切りぶつかつたためか。

われ知らず悲鳴が漏れた。

体勢を立て直そうとやみくもに羽ばたいた。

羽根や毛や枯草が舞い上がって、閉ざされた空間だということが知れた。

「やれやれ、メスはうるさかろうとお前を選んだのだが、これではひな鳥と同じではないか。少し落ち着いたらどうだ」

枯れた声が降ってきて、マガモは埃の中で

声の主を探した。途端に、またもや悲鳴を上げて逃れようとしたばたした。

頭上わずかに鋭い爪、たくましい双脚、茶灰色の堂々たる体躯。そして首周りの金茶色の飾り毛が、空の覇者イヌワシであることに気づいたからである。逃げまどうマガモにイヌワシは、芯からうんざりしたように声をかけた。

「まあ落ち着け。喰おうというのではない。喰うつもりなら、とつくにお前の頸などへし折っているわ」

マガモは恐るおそる頸を回した。とたんに、隅で硬直している野ウサギと目が合つておののいた。命の失われた者は、なぜ触れずとも冷たく固いと感じるのだろうか。白い柔毛さえも、霜柱のように冷え冷えと映つた。

「今夜は猛吹雪になる。ひどく凍れるとわしは見えておる。お前を抱いて暖を取るのだ。吹雪が去つたら帰してやろう。お前は暖鳥なのだ」

日の暮れは強風を伴つて、ふいに訪れた。

世界は、降る雪と舞い上がる雪で、白い闇に閉ざされた。

イヌワシの巢は峰を背にしているので、海からの風はさほど強くない。だが、谷の向こう側がどれほどの暴風雪に翻弄されているかは、木々のうなりでそれと知れた。山全体が悲鳴をあげ、慟哭している。時おり、耐えきれなくなった幹が、ねじ切られ、裂ける音が響いた。

マガモはイヌワシの足の上に丸くなつていた。その灰色の身体をかき抱くように、イヌワシが覆いかぶさっている。両翼の間から、マガモの青緑色の頭と黄色の嘴がのぞいている。

嵐は絶え間なくアカマツの梢を揺らしたが、イヌワシの脚は柱のようにゆるぎなく、マガモにはこの猛禽類が、捕食者ではなく庇護者のように感じる瞬間さえあつた。

「さすがにカモの身体は温い。北の地に住まうだけのことはある」

「いや、おいらもこんなに寒いのは初めてだ。北といつてもおいらがいたのは夏の間だけだし、寒さに追い立てられるようにわたってきたから」

イヌワシは、このマガモが幼鳥だということに気づいた。この山塊の天空を統べる「空

の王」たる自分にこんな口を利くのは、去年生まれたばかりの幼鳥で、親や古参の仲間がこの地の掟をまだ教えていないとしか考えられない。だがその非礼をとがめるには、今夜は寒すぎた。まして近ごろは、日々何もかもがおつくうになりつつある。これも面白からう、とマガモを抱えなおした。

「夜は長い。お前が生まれた北の地の話でもしてくれ」

広い広い草原だった。

丈高い草が生い茂り、豊かな流れが草原を縦横に走っていた。流れは分かれたり合流したりを繰り返して、所どころに浅い湖沼を形作った。湖沼の中に取り残された島状の草むらは、鳥たちのまたとない営巣地となった。天敵のキツネやヘビは流れに遮られて近づけず、深い草は猛禽類から卵やヒナを守ってくれた。

その草原の一角で、マガモは誕生した。十羽ほどのキョウダイとともに誕生した彼は、飛ぶことより先に走ることを覚えた。ヒナの貧弱な羽根では飛び立つことはおろか、羽ばたくことさえ難しい。草原を走りまわって逃

げる脚力が、生き延びるためにまず必要とされるのだった。

短い夏をいろどる花々は、まず黄色のみに反応するハナアブを誘うため、タンポポやキンバイの仲間から咲き始める。追いかけるように、ハナバチの気を引く赤や紫のアザミ、ユキワリソウ。キキョウが夏の終わりを告げるころ、ヒナたちの羽根も生えそろう、秋の渡りが始まるのだった。

花に群がる虫、それを目当てにヒタキやツグミが集まり、ガンカモ類のヒナのかっこうの遊び相手になる。生い茂る水生植物は鳥たちの無限の食欲を満たし、長い渡りに耐える体軀を作る。

色彩に満ちた短い夏、豊かな命の営み、そして永遠に続くかに思われた、過酷な秋の渡り。それらを語るには、マガモは幼すぎた。言葉は乏しく、何よりも、若いということとは眠気が何にも勝るといことだった。イヌワシの双脚に寄りかかり、彼は深い眠りに落ちていった。

イヌワシはやれやれ、というように首を振った。

「若いとは恐れを知らぬことだ」

外は山の啼く声が続いていた。

夜半に風は止んだ。

後を追うように、寒気が山全体を覆った。

強風にどうにか耐えた木の幹が、急激な冷気にたちまち凍り、ミリミリと樹皮が裂ける音がそここに響いた。

その音を聞きながらイヌワシは、暖鳥がいてよかつたと思った。マガモの足は思ったより冷たい。そうでなければ、足を温めるために体全体が冷えてしまう。冷たくても動ける体の仕組みになっているのだろう。だが水鳥の体温は高く、厚い冬毛を通して、小さな太陽を抱えているようにぬくもりが伝わった。

イヌワシはふと、ヒナを抱えている時期のことを思い出した。

その時、彼の傍らにはメスがいた。後頭部の金茶色がひときわ明るい小柄なメスで、彼とともに狩りをし、寄り添って眠った。

イヌワシの縄張りには広い。

この独立峰の北西面すべてが、彼の支配下にあった。

その北端はヒトの生活圏と重なった。ヒト

の住む領域と山塊との境に、鬱蒼たる杉林に囲まれた神社がある。境内にひとときわ高いイチョウの古木があり、彼は気が向くと、その梢にとまつて下界を睥睨した。ヒトは彼を指さして、「オオトリサマダア」と叫んだ。ヒトの仔は「シャガマレ、オオトリサマニサラワレツゾ」と騒いでうずくまつた。大きな鳥は子どもをさらうと思われているらしい。ヒトの仔にしろ、その仲間のキャンキャンと吠えたてる者たちにしろ、やかましいのはごめんだ。彼のねらいは田の畔に出没する野ネズミであり、道ばたに長ながと寝そべるアオダイシヨウである。風を切る音も鮮やかに舞い降り、獲物を驚つかみにすると、すべるように舞い上がる。ヒトは口をあいたまま、彼を見送るのが常だった。

彼の好物は野ウサギや野ネズミ、キジやヤマドリなどの、毛のある動物である。力にまかせて、自分と同じほどの重さのカモシカの仔を狩ったこともある。

血の温かい生き物は、身体を養い、力をつける気がした。ヘビは骨と筋肉ばかりで内臓が少なく、血が冷たいので好きではない。よほど飢えているか、ヒトをからかう気分のと

きに遊び半分で狩るくらいで、喰うでもなく途中に落としてくることさえある。いちどなど、彼がいつもの神社の大イチョウから下界を眺めていると、ヒトの仔の乱暴そうなのが棒切れを振り回して、彼を挑発した。「オメエナカオツカナクネエゾ、オリテコイ」などと叫んでいる。イヌワシの体幹はヒトの仔と同じほど大きく、両翼を拡げれば優に倍はあった。彼はいたずら心に誘われてすいと飛び立つと、田の畔で昼寝をしていたシマヘビをつかみ、ヒトの仔の目の前に落とした。ヒトの仔は飛び上がり、しりもちをついて泣きわめいた。親らしいヒトが駆け寄ってかき抱くと、「オオトリサマニナンテコトヲスルンダ。サラワレテシマウド」と叱った。命拾いをしたヘビがそそくさと草むらに逃げ込むのを見ながら、イヌワシはゆうゆうと旋回した。

番つがいになつてからも、彼はメスと連れ立ってヒトの領域にしばしば姿を現した。ヒトと彼との間には圧倒的な力の差があり、彼の敵ではないと知っている。それどころか、ヒトの営みを利用するだけの知恵もあった。

早春、晴天が続いて、草はらの表面は乾いて底に湿り気が残っているころ、ヒトは茅場に火を点けて野焼きをする。枯草を焼き払って芽吹きを助けるためだが、風のない朝にかすかな煙の匂いを嗅ぎつけると、彼はメスを誘って必ず茅場に現れた。火に追い立てられた野ウサギや野ネズミが飛び出してくるのを、待ち伏せ、あるいは挟みうちにして捕える。その鮮やかな狩りに、ヒトたちは歓声を上げた。

そうやって交互に餌を運んで、彼らは一羽も欠くことなくヒナを育て上げた。

猛禽類は二個の卵を産むが、先に孵った一羽しか育てないことが多い。針葉樹の森は見とおしがきかないため狩場に乏しく、同時に二羽のヒナを育てるのは難しい。だが彼らはヒトの営為を巧みに利用して、繁殖期のため二羽のヒナを育て上げた。それはオスの膂力と彼らの息の合った狩りの方法によるものだった。

イヌワシの番つがいは繁殖期のみならず、一年中をとくに過ごす。ヒナが巣立ったあとの幾つもの冬を、彼はメスをその翼で守って過ごした。小柄なメスの金茶色の頭は、彼の首の

下にすつぽりと納まった。そうやってまどろみながら、彼は春の夢を見た。

イヌワシの寿命は三十年をゆうに超える。

毎年、春まだ浅いころに一、二個の卵を生む。展葉期に合わせて孵化したのは、親の手厚い給餌を受けて成長し、森の梢が色づくころに独り立ちする。彼らの番いもそうやって何羽ものヒナを育ててきた。

夏の日照りで草木が枯れ、草食の生き物が数を減らした年があった。野ウサギも野ネズミも姿を消し、彼ほどの手練れが空身かみで戻る日も多い。ヘビやカエルの類はとうに土にもぐってしまった。彼はヒトの里で瘦せたイエネズミを捉え、メスの待つ巣に急いだ。

メスはマガンの死骸を持ち帰っていた。里近くの沼のほとりで見つけたという。猟師が撃ち落としたものの、立ち木に引つかかかって回収できず、諦めたらしい。猟師の獲物は鉛玉が残っていることが多い。銃創のまわりは金臭く、肉の色が変わっていることもある。傷が小さくても、いずれは全身が黒くなって死ぬ。その肉が毒を帯びていることを、彼は教わらずとも知っていた。弾丸と変色したと

ころを避けて食べるようにメスを制したが、すでに遅かった。

メスは徐々に力を失い、ある朝姿を消した。飛ぶ力も残っていないから、下の溪谷に落ちたものである。凍り始めた谷川は水音ひとつせず、からみあつた枝を透かしてもメスの姿はなかつた。

地上は彼の領域ではない。見えない手によってさらわれたメスを取り戻すすべはなかつた。

記憶の中のメスの姿は、日に日に厚くなる氷のような忘却に覆われて、今ではおぼろげにしか残っていない。彼に限らず、野生の者は過去を振り返ったり、未来をおもんばかつたりすることはない。だが、メスの首のまわりの明るい金色だけは、ときどき泡のように脳裏に浮かび上がってくるのだった。

東の尾根から太陽が顔を出し、凍りついた世界が動き出した。イヌワシの巣にも斜めに日が射し、頭の上がうす温かくなった。イヌワシが固まったからだを動かすと、足の上から転げそうになったマガモがようやく目覚めた。覚めきっていないマガモに、イヌワシは

「おい」と声をかけた。

「お前の役目は終わった。約束どおり帰るがいい」

マガモは猛禽類の黄色く鋭い目に、射すくめられたように身震いした。

「だけどおいらはこんな高いところから飛び立つたことがないよ」

「心配ない。あの鈍重なハクチョウなどは違い、お前たちは助走なしでも飛び立てる種だ。ここはいつも、谷を駆けあがる風が吹いている。翼を広げている限り、間違っても落ちることはない」

そして、涙目のマガモの脚に鋭い爪を立てた。

「もしもまた俺につかまりそうになったら、この脚の傷を見せて、自分はあるときの暖鳥だと言え。一度だけは見逃してやろう」

マガモの脚から滴った血が、巣の床に丸く盛り上がった。

月輪熊つきわねくま

不覚にも、穴に落ちた。

ツキノワグマの縄張りは広い。

森林限界に至る広大な広葉樹林帯は、ブナやナラ、ケヤキなどの豊かな植生に恵まれているが、何本もの深い渓谷によって分断されている。尾根を越え、急な崖を転がるように下って哨戒しなければならぬ。

獣道の途中の湧き水は、量こそ少ないものの手近な水場である。冬の眠りから覚めきつていなかったのは確かだが、知らぬ間に道に穴など空こうはずがない。昨夜の雨で地面の臭いが流されたのも災いした。穴は明らかに爪ではないものによって穿たれており、鋭くとがった青竹が底から地表を指していた。青竹は冬眠明けの痩せた尻を傷つけたが、幸い足や腹は無事だった。穴の中には嗅ぎなれない匂いが満ちていた。

マタギか、とふいにハハの記憶がよみがえった。

クマがまだキョウダイとハハの乳を取り合っていたころ、尾根を歩いてきたハハが急に立ち止まり、遙かな谷底を指したことがあった。黒い影の集団が、谷筋を辿っていた。多くの小さな影も、やかましく吠えだてながら

動き回っている。

マタギだ、とハハが言った。恐ろしい生き物だ、とも。

「ハハよりも大きいのか」

「身体はわれらより小さい。非力で足も遅い。だが、マタギは雷を使う」

雷と聞いて、コドモたちはすくんだ。あの凄まじい音と目くらむ光。恐ろしい雷を使うというマタギに恐怖した。

溪から吹き上げる風に乗って、二種類の臭いが流れてくる。落雷のあとの木の焦げる臭いと、生き物の生ぐさい臭い。あれが大きいマタギと小さいマタギの臭いか、と、こどもだったクマは思った。その大マタギの臭いが、この穴には沁みついている。

畏だ。

今に大マタギが手下の小マタギ（彼はすでにそれがイヌという名と知っていたが）を引き連れてやってくる。そして、雷を使つて――。

クマは咆哮した。

穴の入り口がほの白んでいた。

雨は止んだらしいが、その分、冷え込みは

厳しい。冬眠明けで皮下脂肪を使い果たした身体から、じつとりと湿った夜気が容赦なく力を奪った。このままでは、マタギが来る前に寒さで参ってしまうだろう。

カツ、カツ、カツ…。

蹄の音がして、光が遮られた。

カモシカだった。

見事な角を持った老カモシカだ。

クマは幾度となくこのカモシカを見かけていた。決まって、崖の突端で高みを見つめていた。初めて見た時から毛艶は失せかけて白みがかっていた。クマが生まれるはるか前から、この山塊に棲んでいたと思われた。クマはもともと好戦的な性格ではなかったし、老カモシカには、新参者のクマを畏れもしなければ疎みもしない威厳が備わっていた。

頭が引つ込み、代わりに落ち葉の塊が二度、三度と降ってきた。狭い穴の中は、落ち葉の屑がもうもうと舞い上がり、眼も開けられない。

「じいさん、何のまねだ」

クマは猛り狂った。お互いに敬して遠ざけてきたはずのカモシカが、なぜこの場に現れ

て、嫌がらせのようなことをするのかわからなかった。だが濡れた落ち葉にはわずかばかりの木の实が混じっていて、クマはいつとき空腹を紛らわすことができた。

ガツ、ガツ、ガツ…。

夜明けから蹄の音が続いている。固い地面に当たる蹄の音は徐々に近づいていた。穴の真上に、貼り付けられたような青い空が見えた。温められた地表を水が流れる音がした。日なたの雪が解け始めたのだ。水はブナの木肌をつたい、根元の雪を融かし、細い流れとなって、初めはおずおずと、しだいに大胆に駆け下る。クマの頭上で、せせらぎの音が絶え間なく続いていた。

流れの音が急に強くなった。

と思うと、川のように泥水が流れ込んできた。

水は狭い穴を浸し、腰へ、胸へと上がってくる。

ついには首に達し、クマは恐怖にもがいた。夢中で手足を振り回した。

身体が浮いた。

幼い日、ハハに連れられ、川でイヨを獲ったときの記憶がよみがえった。クマはキョウダイと違い、イヨの味を好まなかったが、それでも浅瀬で遊ぶのは楽しかった。逃げ回るイヨを追って深みに潜ったり、気の荒いオスのイヨに尾で跳ねとばされたりした。満腹になったハハにうながされても、水辺を去ろうとはしなかった。

浮くための姿勢を、身体は覚えていた。

爪が穴のふちにかかった。

夢中で身体を引き上げた。

獣道の上から水路が穿たれていた。岩を回り、木の根をよけ、水路は曲がりながら続いている。穴からあふれた水は、再び細い流れとなって下つていった。

クマは尾根に走った。空腹も尻の傷の痛みも忘れていた。

崖を横切るカモシカが見えた。

クマは吼えた。

木々の吐息のような靄に、カモシカの姿はゆらめきながら尾根に消えた。雪に足跡だけが波線になって残った。

クマがもう一度吼えた。
ズズツ、と雪が動いた。

真鴨まがも

暖鳥のマガモに、いくつかの秋と、それに続く春が過ぎた。

マガモは秋と春の数だけの渡りを繰り返して、数年前から群れを率いるようになった。抜きん出た体格と顔の鮮やかな碧色が、彼を族長らしく見せていた。古傷が、朱色の脚を節くれだつた樹皮に見せている。その足を見たほかの群れも、

「見たか、あれが『暖鳥』だとき」

「イヌワシに捕まって無事に帰るなんぞ、どれほど運がいいのだ」と噂した。

事実、彼の胆力と知力は群を抜いていた。

それがイヌワシの巢から生還したせいかわかれば自身にもわからなかったが、空を統べる者の偉大さと力強さは、若い心と身体に見えない力を与えた。選ばれた者にふさわしくあるうとした。冷静さ、判断力、統率力、族長に求められる資質を過不足なく備えた、真の族長になつていった。

このたびの秋の渡りは、かつてなく大きな群れになっていた。極北の繁殖地で子育てを終えた彼の一族だけでなく、經由地で遭遇した群れも、彼と行動を共にしたがつた。途中の沼沢や汽水湖で羽根を休めながら、いつもの越冬地に降り立った時には、水面が覆われるほどの数になっていた。

越冬地の沼は、独立峰の懐深くに守られている。沼を満たす伏流水は一年を通して温度が一定で、凍ることがない。加えて厳寒と豪雪がキツネなどの侵入を阻み、何世代も前から彼らの越冬地になっていた。彼らはここで番いを形成し、睦まじく身を寄せ合つて春を待つのである。

だが今、その気配は徐々に近づきつつあった。

害意ある者が醸し出す不穏な空気、イヌたちのまがまがしい吠え声、ときたま森を揺るがす鋭い爆発音。

里の上空を飛ぶ渡り鳥は、ヒトの一部が銃を扱うことを知っている。ヒトの多くは騒々しいだけの無害な生き物だが、銃を持つ者と

その配下のイヌが、火を用いて鳥や獣を襲うということも。ヒトの里は田畑や蓮田など、餌場が多い。里近い越冬地では、夜の間に落ち穂を拾い、蓮根を掘り返す冬鳥もいる。だが、マガモたちの沼はマコモやヒシが密生しており、ヒトの領域を侵す必要はなかった。その銃を持つ者たちが、向こうから近づいてくる。

明らかに日脚が伸びたこの時期は、朝方の厳しい冷え込みに雪が縮まり、歩きやすい。しかも雪は深い沢を埋め、崖を覆つて、どこもかしこものつべりとした雪原に変えてしまふ。ヒトがその領域を広げるために侵入するには、またとない季節だった。冬眠から覚めやらぬツキノワグマの巣穴を探し、野ウサギやキツネの罠をかけ、あわよくばガンやカモを撃つて今日の食糧としようとしている。ヒトは笑いさざめき、イヌは興奮を隠しきれない。上空からみれば、一行は峰一つ隔てたところまで迫っていた。

彼は急ぎ配下を集め、言い渡した。

「いいか、もうすぐヒトが襲つてくる。やつらは銃を持っているが恐れることはない。一発目に驚いて飛び立てば二発目にやられる。

何があつても水面から離れないことだ。弾は、水平には飛ばない。舞い上がった者だけが、下から狙い撃ちされるのだ」

彼の直系の者は統制がとれている。だが、今は群れが大きくなりすぎた。一部が浮足立つて飛び上がれば、釣られてわれもわれもと飛び立とうとするだろう。そこがヒトのねらいどころなのだ。

この山峡の沼は、極北の沼沢地とともに、渡り鳥の「母なる地」であつた。

ヒトを近づけてはならない。

マガモは飛び立った。

ズザザーツ、激しい羽音とともに、何ものが降つてきた。イヌワシは気だるげに片眼を開けた。大柄なカモが風切り羽根をたたみながら、彼を見つめていた。侵入者そのものよりも、闘争本能や敵意が身の内に湧いてこないことのほうに、イヌワシは驚いた。

壮年のマガモは、イヌワシの前に片脚を差し出した。

「空の爺さまよ、覚えておられるか。『暖鳥』です」

「ああ、あのときの若造か。立派になった

な。わしも歳を取るはずだ」

イヌワシの羽根は白茶けて艶を失い、黄色い眼も白い幕が張ったように濁っていた。

猛禽類にとって、視力が落ちることは死を意味する。マガモは空の覇者がすでに力を喪っていることに愕然とした。考えてもみなかつたが、あのときすでにイヌワシは壮年を過ぎていたのだろう。老いた王に、自分の頼みは酷なものかもしれない。だがそれを言わないのもまた、礼を失することになるだろう。マガモは、自分がここに来た真意を打ち明けた。

「空の爺さまよ、銃を携えたヒトの群れが、この山深く入り込もうとしています。長い間この山は、ヒトの侵入を阻んできました。ヒトはヒトの、獣は獣の、鳥は鳥の領域を犯さないという暗黙の掟があった。しかしヒトは多くのものを求め始めた。しかも、自分の手と足で捕えるのではなく、銃で」
「ヒトの使う火は、あれは『銃』というのか」
「はい、われらは人里近くを通るので、おのずとヒトの暮らしを見聞きします」

イヌワシにとってヒトは捕食の対象でもなければ敵でもなく、その営為を利用するだけに過ぎない。だがこの山塊でヒトが傍若無人にふるまうのは、空を統べる者として許しがたい。

イヌワシは、マガモの話を聞くために向き合った。

星々を追い立てるように、空が白み始めた。昨日は雪ではなく雨だったが、夜半には上がり、今朝は冷え込みがいちだんと厳しい。凍りついた雪原を伝ってヒトが来ると確信したマガモは、沼の中央に群れを集めた。銃弾は水平にここまでは届かない。飛び立ちさえしなければ、群れを守ることができる。マガモは近づいてくるまがましい気配に身構えた。

沼を囲む高い崖を回り込んで、ヒトの一団がやってきた。獣の皮に身を包み、草で編んだ靴には木の枝の輪をはめて、足が沈み込むのを防いでいる。イヌたちが騒がしく吠えまわり、それを制するヒトの怒声が響いた。

火薬の臭いが漂ってきた。

銃声がどろいた。

「浮足立つな。飛び立つと撃たれる」
マガモの制止も空しく、一斉に舞い上がった水鳥をさらなる銃声が襲った。

「ああ、駄目だ。やられる」

鋭い羽音とともに、銃声が止んだ。

イヌワシが空気を切り裂いて舞い降り、水辺のイヌをその頑丈な爪に捕えて、再び舞い上がった。

沼の中空でイヌが解き放たれた。

水しぶきが上がった。

イヌは浮き沈みしながら、ようやく岸に泳ぎ着いた。ヒトの群れは自分の目が信じられないように、顔を見合わせた。

「オオトリサマダ」

「オオトリサマノタタリガアルドオ」

ワオオオオン、ワオオオオン。

崖にクマの声がこだました。ヒトは一斉に振り向いた。

崖を横切るカモシカがいた。カモシカの足跡は、崖の頂上近くの雪に黒々とした破線を

描いた。

ワオオオオーン、ワオオオオーン。

クマが吠える声に重なって、地が震えた。

雪が割れるミシミシという音と、ズズズツ、

ズズズツと崩れる音が重なった。

「ヤベエ、雪崩ダア」

「雪崩ガクルドオ」

ヒトの悲鳴は雪崩の轟音にかき消された。

マガモの脚は着水に特化している。狭い木の洞に飛び込むには、大きな制動を必要とした。おかげでイヌワシの巣には、またもや盛大な埃や羽根が舞い上がった。

イヌワシはうずくまったまま片目を開けた。

「爺さま、おかげで助かりました。風が変わったので、われらは北に帰ります」

「礼を言われることはない。わしはわしの領域をヒトに侵されたくなかつただけだ」

イヌワシは空を統べる者として、クマは森の王として、そしてカモシカは長老として、思いがひとつになったことだろうか。あるいはこの山そのものの「意思」というものだろうか。マガモは思ったが、それを伝える

る語彙を持たなかつた。

「なんでもいい。わしはもう少し寝る。お前たちも息災で帰るがいい」

また秋に、と言おうとして、マガモはためらった。イヌワシの羽毛は、風になびくスキの穂のように乾ききつて頼りなく見えた。

言葉を呑んだマガモを嗤うかのように、イヌワシは片翼を持ち上げた。

翼がはたり、と落ちた。

そのあるかなきかの風に押されるように、マガモは洞を飛び出した。一族の待つ沼目指して滑空し、振り返ることはなかつた。

グリーン賞 歳を取らなくなつた君と

仙北市 田 口 奈央子

砕けたガラス

誰も知らなかった。誰も知らうともしなかった。誰も理解しようとはしなかった。だから、全部壊れてしまうんだ。人の心は簡単に壊れて、人の姿も簡単に壊れる。人間ほど繊細でガラスのようなものは無いのに、誰もその価値に目を向けようとしなくて、あつという間に壊してしまう。頑丈なガラスならば、一度叩かれても壊れることは無いだろう。だが、繊細なガラスならばどうだろうか。一度叩かれただけで、いとも簡単に壊れてしまう。

「隼巳」

この子は、簡単に壊された。修復がわからないまま、何度も砕かれたガラスは、目には見えないほど細かく散らばり、集めることさえも難しくさせた。

「ご飯食べよ？」

ドア越しに話しかけても、返事は聞こえない。

「今日はハンバーグだよ」

大好きな食べ物も、興味がなくなってしまったのか。

「ハンバーグの匂いでは、つられてこないか」

しばらくしても戻つて来ない僕を心配して、一緒に暮らしているカウンセラーの小戸田先生が二階へやつて来た。

「一日一食とはいえ、その一食すらまともなものを食べていないんだ。おかずだけでもいい。一緒に食べないかい？」

小戸田先生も、日に日に細くなつていく隼巳を心配していた。隼巳の一日の生活は、誰がどう見ても不健康そのものだ。よたよたといきなり一階に降りてきたかと思えば、冷蔵庫から栄養ドリンクを、救急箱からサプリを取り出して、また二階へ戻るだけの生活だ。今までは、あまり隼巳の生活に口を出さないうようにしていた。隼巳の好きなようにさせることが、一緒に暮らす間の少しの休息になれるかと思っていたから。でも、遂に体が限

界を迎えて血を吐いた時は、流石に後悔した。声をかけて、栄養になるものを食べさせてあげればよかった。

「お願いだ、隼巳君。君が弱っている姿を見るのは、とても心苦しいよ」

「……無理には言わない。でも、一緒に食べたいな。完食できなかったら、僕が食べるからさ」

本人にとつてしつこい二人だと思われてもいい。また、元気な隼巳が見たいんだ。

「……ごめん。食欲無い」

やつと部屋から聞こえてきたのは、か細くて震えた声だった。

「分かった。ハンバーグとサラダは冷蔵庫に入れておくから、いつでも食べなさい。ジュースも買ってあるからね」

「……はい」

「では、我々は下に降りて食べよう」

「……はい」

下に降りる途中、何度も隼巳の部屋のドアを確認した。もしかしたら、きちんと閉まつたドアが音もなく開いて、隼巳が出てくるかもしれない。美味しいハンバーグの匂いに誘われて、笑顔になつてくれるかもしれない。

その『かもしれない』という願いが心から離れず、苦しい思いに悩まされるばかりだった。食卓を囲むテーブルには、まだ温かいハンバーグが湯気を立てて置かれている。

「学食もあまり食べられなかっただろう？」

「はい」

「学食は、美味しいかい？」

「先生の料理に比べれば、美味しくありません」

「あまり言っではいけないことだけれど、嬉しいものだね」

「……隼巳が隣で一緒に食べてくれていたら、美味しかったんです。今は、味がするかも分からない」

目が熱くなる。涙が流れないように、グッと堪える。

「^{まいと}舞人君。君も私の大切な子供だ。血の繋がらない親ではあるけれど、君達を支えていきたい。助けて欲しい時は、必ず助けを求めなさい。いつでも受け入れてあげるから」

「先生は、いつも優しいですね」

グッと結んだ涙腺が、みるみるうちに解けて、大粒の涙が溢れて止まらない。

「先生……僕、隼巳がいないと生きていけない

い。学校も楽しくない。大人はみんな隼巳を見捨てる。誰も僕達を見てくれない」

胸に積もったまま、行き場のない不安が僕をいつも縛り付ける。小戸田先生がいなければ、僕も隼巳も死んでいた。それくらい、二人とも、得体の知れない何かに追い詰められていた。僕と隼巳は、精神疾患を患って三年前に先生に預けられた。先生のおかげで、三年間生きていられた。高校二年生になった今の目標は、隼巳と先生と一緒に美味しいものを食べて生きること。全日制の学校に入学した為、正直苦しいことしかない。

「クラス替えて雰囲気が変わって、色々な変化についていけないだろう？」

「はい」

「でも、君も隼巳君も頑張って生きている。入学してもう二年経った今でも、こうして私のご飯を食べてくれている。ありがとう」

先生は、絶対に生きることと普通のことだと思わずに接してくれる。僕達の身の回りは、カッターやハサミ、包丁などの凶器が備わっている。いつでも死ぬる環境にいるのに、生きていて偉いと褒めてくれる。その優しさが心に染みて温めてくれる。一度、高

校の先生から『甘えて逃げることは許されない』と学年全体に向けて言われた。苦しかった。弱さに逃げて、甘える僕は酷い人なのだと理解せざるを得なかった。

『高校は社会へ出ていくはじめての一步だから、きつく言われることもあるだろう。でも、君達は逃げていない。そうやってリュックを背負って学校へ行こうとしている。頑張っているよ。どんな顔をしていてもいいから、必ず帰っておいで。迎えに来て欲しいければ、電話を寄越しなさい。迎えに行きます』

ずっと、優しすぎる言葉に押されて、今日も僕は学校に行ってきた。

「涙が溢れて、ハンバーグも食べられないね」

先生が微笑んだ。ハンバーグよりも、涙の味がしていることに気が付く。

「すみません。残してもいいですか？明日の朝食べます」

「構わないよ。お風呂を沸かして入りなさい。明日も早いからね」

「はい。お風呂やってきます」
「いつてらつしやい」

お風呂場に向かう途中も、何かと考え込ん

でしまう。この家は広い。家も広い分、窓も大きい。満月の光が差し込んでいる。僕と隼巳は先生の力を借りて照らされている月だ。いつかひとりで輝ける月になるまで、頑張っていけるだろうか。

「隼人君」

「はい！」

びつくりした。いきなり声をかけちゃ、駄目ですよ。

「ああ、ごめん、ごめん。驚かせてしまったね。私は二人が入ってから、ゆっくりお風呂に入るから、君があがったら隼巳君に声をかけてくれ」

「分かりました」

頑張ってみよう。先生の手を借りながら、隼巳と一緒に笑える日を作っていきたいと、胸に思いを秘めた。

隼人君も隼巳君も、三年前に比べていつそう、食が細くなってしまった。隼巳君は、一日の食事が栄養ドリンクやサプリメントに偏ってしまっている為、体に悪い影響を与え続

けている状態だ。お医者様からも、きつく言われた。一食だけでも、栄養になるものを食べさせなさいと。私の分だけの食器洗いも、これで何回目だろうか。前は、三人分の食器を洗っていたはずなのに。私は溜まった仕事を片付けながら、患者さんとのカウンセリングの際に使うメモ帳に目を通した。

『死にたい。死にたいです』

『毎日、苦しいんです。みんな、僕を笑っているようで。死んだ方がマシだっと思うんです』

『助けてって言ったら、先生は助けてくれますか』

『夜になると辛くなるんです。なんでか、分からなくて……』

メモ帳に目を通す度に、この子達の苦しい思いが伝わってくる。助けてくれる人が誰なのか分からないまま、頼れる相手すら見つけられなくて、苦しくて、苦しくて。

「先生。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

隼人君は、最近笑顔が増えてきた。私は彼らの為に頑張らなくてはと、この身を奮い立たせた。自室を出て、隼巳君の部屋へと向か

う。

「隼巳君。少し私と話さないかい？」

寝ているだろうか。そう思い、部屋から離れようとする声聞こえた。

「先生。助けて」

「入ってもいいかな？」

「うん……」

「ありがとう」

やはり、心は弱りきっていた。部屋に入り、姿を見ると、ベッドの上で月明かりを浴びながらぼんやりとしている隼巳君がいた。

「綺麗な月だね」

隼巳君の部屋は、ちょうど日当たりがよく、晴れている夜は月がよく見える。

そうだった、今日は……

「……紗耶都が、まだ俺に話しかけてくる」

「隼巳君」

「舞子の声が聞きたいのに、大嫌いな奴が言葉をかけてくる。あの時殺したのに、殺したのに、まだ生きてる。まだ俺を苦しめてくる」

「隼巳君。深呼吸を」

「舞子は？舞子はどこにいるんだよ。あの時抱きしめた舞子が、舞子が」

呼吸が荒くなっている。落ち着かせなければ。

「深呼吸をして、隼巳君」

「先生、先生。俺、また、紗耶都のこと、殺さなきゃ」

「隼巳君」

近くに寄り、抱きしめるような形で背中をさする。

「舞子、まいこ」

泣きながら、苦しいと、私を求めた彼を救いきれない自分に嫌気が差す。救いたいの、目の前の命を救いたいの、私が弱ってしまう。この子には私しかないのに。

「落ち着いたかな？」

しばらく背中をさすっていると、荒くなっていた嗚咽が、だんだん落ち着いてきた。

「……月が、舞子を思い出させて、舞子は大丈夫かな」

細い声でぽつりと呟いた言葉に、胸が締め付けられた。

「大丈夫だよ」

「美味しいご飯、食べられたかな」

「好きなものを、ちゃんと食べたよ」

「そっか、よかった」

泣き疲れてしまったのか、崩れ落ちるように眠ってしまった。頭を枕にそつと置いて、ベッドに正しい形で寝かせる。薄い毛布をかけようとした時、隼巳君の足元に写真立てが横たわっていることに気がついた。手に持つて見てみると、彼の妹、舞子さんの写真だった。

「ゆつくりおやすみ」

写真を机の上へ置き、私は部屋を出た。

「傷のひとつも癒してやれなかった……」

後悔が口からこぼれる。彼を助けようとして、何度空回りしたのか。隼巳君は、中学一年生の時に、世間から『人殺し』というレッテルを貼られた。剥がれないレッテルを隠しながら生きていくことは、彼にとつて困難な事だった。

『事件の記事です。未成年だから名前を公表されることはなかったのですが、最近の子達は情報が早いですね。隼巳が事件の犯人だと、気づかれ始めてしまいました』

『部屋に引きこもるばかりで、会話もできていないままで……確かに、隼巳はいけないことをしてしまいました。でも、全て舞子の為だと思うと、なんだか心苦しくて。先生。ど

うか、隼巳を助けてください。お願いします』

「ご両親は『私達が変に介入して、隼巳のストレスを溜めてしまうのは避けたい』と仰っていた。すこし見放した状態にしておく方が、彼の為だと考えてくれたのだ。本当に救われて欲しいと願っている方々だ。」

「……もしもし。夜分遅くにすみません。はい、隼巳君のことで。はい、お時間頂いてもよろしいですか？」

少しだけでも、助けてあげたい。着信履歴を遡り、隼巳君の事件を担当した刑事さんに電話をかけた。

鈍い雨音とささいい

「免疫力が下がっています。お薬は処方しますが、その前に栄養になるものを食べさせてください」

「分かりました」

病院へ行く度に、栄養になるものを食べさせなさいと言われていた気がする。

「すみません、先生。熱とか、出しちゃつ

て」

「仕方ないよ。昨日の突然の雨でやられてしまったんだ。避けようがないよ」

「はい」

久しぶりの熱で、体が参っている。

「だるいかい？」

「だるいです」

「お昼は、お粥にしようか」

「お願いします」

血の繋がらない子供にここまで優しくしてくれる先生に、感謝よりも疑問が浮かぶ。失礼極まりない考えだ。

「八代^{やしろ}舞人さん」

「はい。ちよつと待っていてね」

薬を貰うまで、そんなに時間はかからなかった。幼い頃は、この時間がつまらなくて嫌いだだったが、今は何も感じなくなった。体のだるさに何もかも負けてしまつて、先生の後ろ姿もぼやけてしまう。

「帰ろう」

意識が半分飛びかけていた。

「はい」

「車で寝ていきなさい」

「ありがとうございます」

先生の腕につかまつて、よたよたと歩く。なんだか、卑巳と同じ歩き方だ。

「気をつけてね」

車の段差さえも億劫に思える。

「よし。それじゃあ、横になつて休んでいて。着いたら起こすから」

「はい……」

もう、眠い。車に先生が乗ったタイミング

で、深く瞼を閉じた。

「舞人君。舞人君、着いたよ」

もう、着いたのか。瞼を閉じて、家に着く

まで一瞬だったな。

「起きれるかい？」

「はい……すみません、少し、手を貸していただけますか」

「いいよ」

先生に体を支えてもらつて、起き上がる。体が弱つてしまつたと、体の内側から訴えかけられている気分だ。家に入るまでも、先生の腕につかまつて歩くしかなかった。

「二階までついて行くよ」

「大丈夫です。手すりがあるので」

「駄目だよ」

「いや、大丈夫です」

「駄目だ。私もついて行く」

「……はい」

優しさの圧に負けて、僕は素直に先生に支えてもらった。

「お粥を作つてくるね」

「ありがとうございます」

自分のベッドが一番落ち着く。横になつてスマホを開く。学校からのメールを無視し続けて、もう未読のメールが数十件に昇った。

「だるいな……」

雨の音が聞こえてくる室内は、頭の中が空っぽになる。ポーツとして、目を閉じそうになる僕を起こしたのは、メールの着信音だった。面倒くささを感じながらも覗いたスマホの画面は、僕の眠気を吹き飛ばした。SNS上で届くメールが表示されるロック画面には、『電話したい』と一言表示されていた。僕は直ぐに電話をかけた。

「……もしもし」

「おはよう。舞人」

ああ、僕が聞きたかった声だ。

「もう、こんなにちはの時間だよ」

電話越しから聞こえる激しい雨の音は、家の中から聞こえる雨音ではなかった。

「ねえ、今どこにいるの」

「外」

「風邪、ひくよ?」

「ひいてるよ。もう、関係なくなるけどね」

「戻ってきなよ」

「無人。俺さ、今から」

「うん」

「俺さ——」

「……分かった」

雨の音で消されかけた声は、確かに僕に届いたよ。でも、少しだけ苦しい。でも、二人で決めた約束は守りたい。どちらかが死ぬと覚悟を決めたら、絶対にその覚悟を揺るがさないという約束を。

「隼巳。いつてらつしやい」

「いつてきます」

『いつてきます』のアンサーである『ただいま』が聞けることはもうないけれど、見送ったからには、きちんと『さいご』まで送り届けたい。

「待って、隼巳。まだ切らないで。さいごま

で一緒にいさせて」

「分かった」

雨音は強くなるばかりだけれど、突然切れた電話の最後の音は、水が大きく弾ける音だった。

「隼巳君?」

何度も声をかけたが、部屋の中から聞こえるのは強くなるばかりの雨音だけ。それもそのはずだ。隼巳君は、部屋の中にいなかった。

「隼巳君!」

隠れられそうな場所を隈無く探した。クロ―ゼット、机の下、ベッドの下。いない、どこにもいない。今度は、家中を探した。ずっとリビングにいたから、彼が部屋から出てくれば直ぐ分かるのに。この家は吹き抜けのスタイルだ。一階から二階の確認は一目でできる。無人君を連れて帰ったのが午後一時。それからお粥を作り、無人君の部屋へ持ってきて、しばらくニュースを見るなどして、ほとんどリビングから離れていない。頭の中が真

っ白になる。靴は玄関に揃えてあるのに、靴を履く本人がいなくなっている。嫌なことを考えた。

『小戸田君。人間はね、なんでもできるの。素晴らしくもなれるし、恐ろしくもなれる。世界を救うヒーローになる人もいれば、世界を怖がらせるヴィランになる人もいる。なんでもなれるのよ。ただ、後者は考えたくないけれどね。実は、後者になる人が多いのよ』

大学時代の恩師に教わったこと。人間はなんでもできる。今、目の前でその言葉が現実になったとしたら……

靴は履かずに、どこかへ出ていったとしか考えようがない。お風呂場、リビング、トイレ、各空き部屋。この家全体で隠れられそうな場所を探したが、どこにもいなかった。静かに眠る無人君の部屋にもお邪魔して、隠れられそうな場所を探してみた。本当にどこにもいないのだ。

「どうすれば……」

パニックだった。何をすればいいか分からず、呆然と立ち尽くしていると、スマホが鳴った。隼巳君かと思いき、誰からかかかってきた電話かも分からないまま、急いで電話に出て

しまった。

「もしもし！」

「おー、大きな声出すなよ」

「え、ああ、すみません」

電話をかけてきた主は、お世話になつて
いる刑事さんだった。

「焦ってるな」

「ええ、少し。すみません。今は忙しいの
で、切つてもいいですか？」

「加賀屋隼巳が街中で目撃された」

「……え」

あまりに唐突な告白に、啞然としてしまつ
た。

「大雨の中、傘を差さずに歩いている少年が
いると、午前十一時頃、通報を受けたんだ。

通報を受けた近くの交番の者に補導してくれ
と頼んだところ、あつという間に逃げられて
しまったらしい」

「何故、隼巳君だと分かつたのですか」

「防犯カメラだよ」

街中を通つて行く目的地は、いったいどこ
なんだ。どうして、この雨の中出ていった？

「早めに動いてくれて良かったです」

「警察の手を振り切つて逃げ出したんだ。や

ましい事がないとは言いきれないだろう？」

「はい……それで、隼巳君は」

「今探してる。まだ執行猶予期間がある時
に、逃げ出したんだ。あんな子供とはいえ、
申し訳ないが犯罪者だ。警察も動かなきやい
けない」

「刑が重くなることはありませんよね」

「誰も傷付けていなければな」

「不謹慎なこと言わないでくださいよ!!」

つい、声を荒らげてしまった。

「……不安なのは分かるが、俺達は残念なが
ら疑うことが仕事なんだ。最悪な場合を常に
予想して行動しなけりゃいけない」

「そう、ですよ。すみません」

年甲斐もなく不安に煽られて、恥ずかし
い。

「ただ、アンタだけが加賀屋隼巳を救えるの
は確かだ。俺達は必死になつて探すし、見つ
ける。アンタは自分の大切な子供を信頼して
待つてる」

私だけが救える、加賀屋隼巳の人生。

「見つけてください。お願いします」

「ああ。今、俺を含めた警察が何人か家に向
かう」

「分かりました」

最悪な場合を常に予想して動かなければい
けない。隼巳君は、誰かを傷付けるようなこ
とはしない。私は衣食住を共にしているから
声を大にして言えることだが、見ず知らずの
他人からすれば、恐怖の対象でしかない。

「隼巳君。必ず戻つてきて……」

こればかりは、神に願うしかない。救いた
い。何よりも大切な二人を。

「近くの防犯カメラから、加賀屋隼巳君の
動向を探っていますが、まだ街中を出てから
の足取りが掴めておりません」

警察の方は丁寧に説明してくれるが、正直
不安で仕方ない。

「この辺りは、街中を出て直ぐに森林があ
る。街中の防犯カメラを隈無く探している
が、もし見つからないとしたら、森林に入つ
た可能性が高い」

「……あの森林は、隼巳君が」

人を殺した場所。

「ああ」

最悪な場合ならば、彼はきつと」。

「怖いか」

「ええ。恐ろしいですよ。そうならないことを願っていますがね」

もし、隼巳君がいなくなったら、舞人君はどうなってしまうのか。隼巳君を一番に大切に思っている彼が、突然大切なものを失くしたとなれば。想像したくないが、想像がついてしまう。

「八代舞人君にお話を伺いたいのですが、可能ですか」

嫌な考えが張り巡らされる脳内に亀裂を入れたのは、若い警察の方だった。

「少々お待ちください。彼の気持ちも聞いておかなければいけないので」

私は、恐る恐る階段を登った。四時頃にお邪魔した時、寝ていたとはいえ、今もスヤスヤと寝ているとは考えづらい。

「舞人君。少しいいかな？」

「……はい」

真つ白なドアを開けると、そこには机に並んだ写真立てを眺めている舞人君が立っていた。

「たくさん、人が来てますね」

心臓がドキリとした。

「すまない。伝えないままで」

「僕を氣遣つてくれたんですよ。謝らなくても、いいですよ」

もう弱っている。声色はそう語っている。

「警察の方が、君に話を聞きたいそうなんだ」

「……断つても、いいですか」

やつぱり、そうだよな。

「分かった。私から申しておくよ。君はゆっくり休みなさい」

ひとりでいることが、今はいい選択なのかもしれない。

「すみません。今日はお断りさせていただいてもよろしいですか。少し休みたいようでしたので」

「分かりました。では、舞人君の様子も見て、次の機会にお話を伺わせていただきます」

「ありがとうございます」

刑事さんにも深く頭を下げ、お礼をした。

「八代舞人は、加賀屋隼巳と仲がいいのか？」

雨が大きな音を立てて降り、一向に止まない外を眺めていると、刑事さんが質問をしてきた。

「はい。とつても」

「二人の関係は？」

「もともと、幼馴染の二人です。幼い頃から行動を共にしている、言わば離れられない親友同士です」

「八代舞人と加賀屋隼巳は、同じ時期にアンタの所へ来たのか？」

「質問が絶えませんね」

私は、台所にあつた少し高級な紅茶を手にとった。

「ええ。二人とも同じ時期に私の元へやって来ました。隼巳君は、刑事さんも知つての通り、彼の両親に頼まれて一時的に引き取る形になりました。舞人君は、私が望んで引き取りました」

少し赤みがかつた紅茶が、台所の電灯に照らされる。

「望んで引き取つた？両親から承諾を得たのか？」

「いいえ」

「誘拐か？」

「まさか。ちゃんと正当な理由ですよ」

私を含めて三人分の紅茶は、味が薄くなくなってしまった。

「舞人君は、隼巳君が事件を起こした当日に、お母様に殺されかけていますからね」

「……殺されかけた？」

「もともと、精神疾患を患っていたお母様は、舞人君と夫を頼りに生きていました。しかし、耐えられなかったのでしょうか。ある夜、一家心中を図ろうとしたお母様に刺されたくて大量出血。死まであと一歩というところで、警察が止めに入り九死に一生を得たんです」

「……父親は？」

「心臓を一突き。ほぼ即死でした」

私が舞人君を引き取ったのは、お母様の影響で親族が皆離れていき、本当の天涯孤独になつてしまったから。

「カウンセリングで初めて彼を見た時、痛々しい包帯が目に入りました。当時の担任の先生から聞いた話では、自傷も酷かったようで、もともと精神的に弱っていた部分がある……だから、彼の了承を得て引き取ったの

です。これでも、私は臨床心理士なのでね」

まだ十四歳の子供達が、私の知らないところで今日も苦しいと泣いている。誰も気づけない状況を見て見ぬふりをして、ただ生きていたくない。

「なんで、そんなに他人に優しくできるんだ」

今まで出会ってきた全ての人から問われたこと。

「……私が苦しかった時、誰も助けってくれなかったからですよ」

警察官になりたかった。保育園児の頃から中学二年生の時まで堂々と語っていた夢。

「私、頭が良くないんですよ。だから、高校も第一志望から大きく外れた高校に入学しました。高校でも成績が上がることはなく、大層も諦めるどころでした」

あの時の、悔しかった心がじわじわと思ひ出される。

「それで思ってたんです。私を助けてくれる人は、誰もいないと」

両親も、先生も、出来がいい姉やクラスメイトも。全員助けを求めても、助けてくれなかった。

「私が人を助けるのは、私が自ら決めた道から外れたくないからです。見せかけの優しさなら、いくらでも与えてやれます。私は本当の温かさを、彼らに、私を頼ってくれる人達に与えたいのです」

少々、自分語りが過ぎた。

「こんな人間はきつと、嫌われてしまいますね」

泣いてしまうほど疲れてしまったなら、休ませなければ。カウンセリングに来た人達は、気づかれないように隠した傷が痛みを訴えたからやつてきたんだから。

「無駄話でしたね。邪魔をしてしまい、申し訳ありません」

無駄話の間にぬるくなった紅茶を、刑事さんの前へ持っていく。目の前に出された紅茶に、直ぐ口をつけた刑事さんの顔は少し険しくなった。

「ぬるい……」

「すみません」

「……アンタ、人間の鏡だよ」

突然、質問しか出てこなかった口から、褒める言葉が出てきた。

「臨床心理士はアンタの天職だと、俺は思っ

てる」

「ありがとうございます」

私も、正直そう思っているんです。今、初めて、夢を諦めたことは良い選択でもあったと思うようになったんです。

「長居してすまなかつた」

「いいえ。これで隼巳君が帰ってくるなら、何をされても構いませんよ」

「そうか」

「はい。ああ、それと、隼巳君のご両親にはもう伝えてありますので、捜査に進展があったらそちらにも連絡をお願いします」

「分かつた」

隼巳君がいなくなつて五時間が経過した。

私は、何もすることができないまま、今日を終わらせようとしていた。

た」

隼巳は、水死体で僕達の前へ姿を現した。

僕達が知っている姿とは、全く違う姿で。覚悟はしていた。でも、実際に目の前にしてみると、悲しいとも、気持ち悪いとも言えない感情が体を襲つた。

「君は必ず、私が守るから」

大切な子供を失つた絶望が、ひしひと先生の心に染み込んでいることに気がついてしまった。先生の、温かく大きな手が、僕の肩にそつと置かれて、僕は失つたものの大きさを、やつと実感できた。

歳を取る僕達と、
歳を取らなくなった君

「こんにちは。今日は卒業式でした」

普段は脇役になるカスミソウの花束を抱え、墓石の前で報告をした。

「僕は、国立の心理学部への入学が決まりました」

小さな墓石は綺麗に保たれていて、一つの

花立てに挿したカスミソウは、青空に浮かんだ雲のようにふわふわしていた。

「隼巳がいなくなつて、もう一年が経つて……早かつた」

夏の残暑から少し涼しさが顔を出し始めた九月の中旬は、どんな服装を着ればいいのか分からないのが悩ましい。そんなくだらない話をずっと聞いてくれていた隼巳は、今どうしているだろうか。死んでしまった人間に直接話しかけられないけれど、側で聞いてくれることを信じて、こうして飽きずに話しかけている。

「小戸田先生は、今も優しい先生のままで、たくさんのお患者さんの気持ちと向き合っています。僕は、これから始まる新しい生活に、少々怖さも覚えながら笑顔で頑張ってみようと思います」

なぜか、ずつと敬語で話しかけ続けている。自然と敬語になつてしまう不思議さに、笑つてしまった。

「なんで敬語なんだろうね。おかしい。隼巳といえる時は、いつもタメ口だったのに」

墓石に手を触れて、日光の暖かさを感じてみる。

この程よい暖かさが、隼巳自身のものだったら良かったのに。

「……隼巳より、一つ年上になったよ。成人して、選挙権を貰って。でも、全く自覚がないんだ。大人になりきれないって、こういうことを言うんだなって……」

無理矢理大人にさせられたような、そんな感覚がして自分が嫌になった。一つ歳を取って、これから隼巳とどんどん歳が離れていくと考えた時、とてつもなく虚しかった。

「僕も、十七歳でいられたらなあ」

こぼさないように、こぼさないようにと我慢していた涙は、強く願った思いを言った途端、ボロボロと溢れてきた。

「まだ、隼巳と一緒にいたかった」

まだ子供のままでいられたなら、僕達はまだ先生に守られて、今晚も美味しいご飯を食べていた。でも君のおかげで、そう願っても変えられない時の流れに、少し従ってみようと思えたんだ。

「小戸田先生のように立派になれるかは分からないけれど、臨床心理士になって、誰かを救いたい」

そのために、前に頑張って進んでみようと

思う。

「隼巳に会うまで、しばらく時間はかかりそうだけど……頑張ってみる。だから、見て。僕が君に会いにいくまでの道のりを」

何十年後に出会う約束は、きちんと果たせるだろうか。不安だけれど、頑張って生きて、約束を果たすよ。

歳を取らなくなった君と、歳を取る僕の、果てしなく長い約束を守ろうと空に誓って、僕は今日も明日のために生きていく。

詩

詩

最優秀賞 ホリゾントライト

大仙市 深町 一夫

たとえば

それは一枚の切符

Feb 24. 2023 と

風のインクで記されているけれど

まだ何も決まっていはいない

ただ旅はすでに始まり

記憶すら持っているもの

ホリゾントの窓には

青空と向日葵の畑がつづき

初めて出会う人々の笑顔と

哀しみの理由を知っている私は

心のスケッチブックを開き

光のペンで書きとめる

数えきれない程の争いに

埋め尽くされた歴史でも

戦場の体験は明確なのに

生傷はいつも曖昧な昨日

夢という名の

貨物輸送機の

搭乗券だったとしても

時という荒野に

未来の花の種は播かれ

散りゆく姿も

遺伝子の中に書かれているのに

近づく死の臭いに怯え

穢れたミサイルを打つ者は

野に咲く花の名前さえ知らないままに

みずからも乗る方舟を

壊し続けるのかもしれない

それでも約束のその日

私はひとり

大地の力を信じる農夫となり

遙かな地平線へと

黄金色の麦の収穫を始めるだろう

たとえばその

一枚の切符が

砲撃された

奨励賞 草の岬

秋田市 鈴木修 一

柔らかい草を踏みながら岬を進むと
岩々の貌かおが見えはじめ

不意に聞こえて迫る大海の響き……

緩やかな斜面は数歩のうちに尽き

息をのんで断崖のふちに立ちつくす

寄る辺ない思いでふり返る

ゼブラの入道崎灯台

息を切らして父と登った遠い日

ちようど私の

倍ほどの歳月を負いながら

遠くをみつめていた父の

齢よわいに達した自分におどろく

展望デッキの人影は

夕日に輝く沖を向き

視線が放つ矢のように

波の上を貫いて

かがやき燃え入る海鳥の影

去りゆく春を惜しむ調べに

頭上に起こるトビの笛

断崖の空から眼下の磯へ

にらみを利かせて描く輪を

伸ばせば手の届きそうな

草原にも被せて

トンビが狙うものは……

バッグに潜めたパンのかげら？

無防備に過ごした歳月のすき間に

置き忘れてきた大切な何か……

草の岬のもどり道

落とし物かと拾いかけた

紫色に光る飾りは

岬の風に根を張って岩間に咲いた

けなげなスマイレの花だった

奨励賞 森の書店

井川町 小林 康子

森がまるごとの書店

森の生命が本になる

苔むした岩肌を流れる水の音

その音に乗せて

だれかがページをめくる

無表情の本が生きかえる

森の書店では

記憶も並んでいる

遠い記憶は色褪せることなく

小さな記憶はかけがえのないものとして

巻きつく蔓に並び下がつている

森の書店では

時間も売られている

柔らかなこもれ日に包まれ

失われた時間

継ぎをあてられた時間が

豊穡な物語に書き換ええられ

積まれている

風が心地いい

くねくねと蛇行したり

斜面を登つたり

ゆつくり歩く

細い滝の近くに

詩集コーナーがあるはず

目あての詩集はそこにあるだろう

朽ち木を椅子にしたサロンから

鳥の声が聞こえる

どこまでも新しい緑に染まっている

初夏の森

本の売り場はそこかしこにある

稚児百合の群生しているあそこに

えごの木の白い五弁の花が

ひっそりと垂れている下に

浅みどりの光のなかで

出合う一冊の本

さつきまでこの本はあの大樹だった

時を置いてゆける

心を置いてゆける

森の書店

森の書店には

旅人がよく立ち寄る

奨励賞 ラインの黄金

能代市 西村 慧 亮

僕らは光る海の中からずっと一緒に

心と心が縫い合わさっていた

約束の麦畑でガス灯で図書館で

浮遊して雲まで届きそうだった

君の影が乱反射して

黙り込んだまま僕の前を

寄せては返す振り子の粒

窓辺に幽かに咲いていたの

倒れ込んだ鳥に似た道の背中の上で

僕らは違う方向を向いていた

それぞれに感じた春の声を追いかけていく

糸を互いの片手に括り付けて

だけど針が旋回しつつ

言葉たちが足を滑らせて

いつからか霜が降って溶けていた

北風を右に感じるよ

君の影が乱反射して

黙り込んだまま僕の前を

寄せては返す振り子の粒

窓辺に幽かに咲いていた

だけど針は旋回する

だけど針は旋回する

寄せては返す振り子の粒

知らない道は続いていくよ

入選 紫陽花

秋田市 いしざと ゆうき

裏庭の

紫陽花の一株は

えも言われぬ色彩

咲いて間もない

額の花

おとし
一昨年の春から

高齢の 父の命は

揺らぎ出し

六月の終わり

額紫陽花は

のこる父の命を

めいっばい

吸い上げたかのように

ひと際 色鮮やかに

黄泉への旅立ちを

仄めかし

覚悟を 促した

七月

ある朝の あわいを突いて

魂が 旅立とうとする

ほんとうは 何も

恐れなくてもよいのだ

元より 定められた

しゅつたつ
出立なのだから

一年後

私に 青天の霹靂

二度の入院 大手術も

ことなきを得て

三度目の退院の日は

奇しくも 父の三回忌

まるで

見守っているという

あかし
証のよう

その日

裏庭の 額紫陽花は

えも言われぬ青色を

深々と

滲ませていた

父が逝った年のように

入選 青いトマト

秋田市 安宅 キサ子

猛暑 気温は 35度

むぎわら帽子 首に手ぬぐい

じつさま 家の裏の畑へ

額に にじむ汗を 拭きながら

「暑いなあ……」

と、独り言

「んだな……、暑いなあ」

と、オウム返しに 声がない

ばあさんは 転んで骨折・病院へ

じつさまの言葉が 宙に散る

乾いた 砂地に

ぐつたりした 夏野菜

キュウリ ナス トマト スイカ

しおれた葉っぱの 間から

か細い声が 聞こえた

(水を……、水を下さいな！)

じつさまと ばあさんが

我が子のように育てた 野菜に

命の水を

ジャン ジャカ ジャー

ホースから ほとぼしる 水

力がなくなった 葉っぱが

生き返ったように 水を浴びている

ばあさんが好きな 青いトマト

食べて旨い 真っ赤なトマト

ぶら下がっている 青いトマトを見て

ばあさんが 言ってたなあ……と

「青いトマトは いいね。」

たつぷりと 実がしまつてさ

生命力 感じるよ

はちきれそうで 元気もらうね」

じつさまは 考えた

ばあさんが 一番 喜ぶものは

なんだろう……と

じつさまは ばあさんのお見舞いに

大きな 青いトマト 一個

「ほれっ！」

と たった 一言だけ

一人は 淋しいよ とか

つまらないから 早く帰ってくれ！

とかは 絶対 言わない

今さら 言えないのだ

ばあさん、青いトマトを 手にして

「クスッ！」と 笑った。

声を出して 笑った。

(じいさん らしいや……)と

入選 手帳

にかほ市 鈴木敏男

手元に年々の手帳が約五十冊・・・

年という金文字も薄れ

開くと色褪せシミも残っている

令和の香りはあるものの

昭和から平成の香りはもう失せている

この先のことを考えると

過去の記録は捨てよう

明日には焼却しよう

そう思いながらも

捨てることも出来ずきょうになった

焼却しようとすれば

自らを自らが消すようで

手に取る手帳にためらいが先にたつ

三百六十五日、約五十年

思いの詰め込まれている手帳なのだ

予定欄には日々の事が

時には二行になったり三行になっ

て開けばあの頃のことがかきやかに立

つ自治会だったり、生産組合だったり

消防団だったり、PTAだったり

そして、職場の事だったり・・・

役員会も会議も、それに飲み会も

そのころには予定欄には空白がなかつた

今思えば満席のバスに

立ち通しだったようなもの

それでも日々を確実にこなしていたのは

若さだったのか・・・

だが昨今は

病院行きだとか

孫の事柄・親族のあれこれと

並ぶ日々の予定欄

手帳は年の刻みとして残る

処分できないままに

過去の形として手元に残る

今年手帳を求めるのは止めよう

そう思いながらも

年末が近くなれば書店にならぶ

手帳・・・

私に

今年はどう生きるかを問いかけるように

様々な手帳が書店にならぶ

グリーン賞 女の子の日

潟上市 金乃華穂

世界が減んでしまう程の痛みと

苦しみと

息も出来ない程の長さ

朦朧とした意識

女の子である為に 引き換えにしたもの

子を成す為に 生み出したわざ

私に降りかかる血液の雨もしくは、

流れ出る塊

繋いできたものを断ち切ろうとする意志は

私の思いは

非生産的に求めてしまう感情は

からだ
身体は

女の子をやめて 仕舞いたい程に熱く

子を成さずとも 幸せな程に冷たく

私に降りかかる否定の雨もしくは、

流れ出す私

ズキズキと痛む子宮は

またもや私を惑わせる

困惑は逃避を呼び、逃避は辞退に成り代わる

(まともに立てない歩けない話せない息が出
来ない目が開けられない聞けない動けない終
わらない痛い苦しい気持ち悪い気持ち悪)

私の子宮が泣いている

真つ赤な涙を流している

想い人と結ばれない結末に

社会から受け入れられない現実

ズキズキ ズキズキ

泣いている

女の子のままでも 女の子でなくても良い

そんな世界は朦朧と

子宮の中で生きている

ズキズキ ズキズキ

流れ出す塊

生きた証は剥がれ落ち

私に降りかかる痛みの雨もしくは、
せいめい たね
生命の種

息も出来ない程の長さ

苦しみと

世界が減んでしまう程の悲しみ

その涙

グリーン賞 十八の音

先生の声

鹿角市 空音樹

奏

シャーペンの音

音が響いた

プリントを配る音

年が開けた笑い声

テスト終了後のざわめき

始業式の鐘の音

放課後のチャイム

歳を重ねた時計の音

突然ふってきた雨の音

希望で溢れた心の音

受験を自覚した心臓の音

消し忘れた朝のアラーム音

大人を自覚し不安になった心の聲

起きなさいという母の声

怖くなり浅くなった呼吸音

登校中の足音

ぜんぶ ぜんぶ抱えて

同級生の話し声

かかえこんで
うけとめて

黒板をすべるチョークの音

ぼくは十八になった

グリーン賞 舞台袖ロマン

私は…

能代市 大塚 莉々

あと十秒で

このステージは私だけのものになる。

不思議と緊張はしていない。

(トウシューズの紐は解けてない?)

(チュチュのフリルは捲れてない?)

ありがとう、もう大丈夫だよ

これから始まるステージの

主役は私。誰にも渡さない。

あと五秒で

私は舞台に大輪を咲かせる。

指の先、足の先までもが花卉

舞台の華、それが私。

あと一秒で

私は観客に魔法をかける。

暗い舞台袖から解き放たれたように

ステージに向かい、

グリーン賞 猫と私

秋田市 原 田 さゆり

来世は

猫になりたい

可愛がつてもらえるから

何かに限らず

撫でてもらえるから

心を痛めることが

ないらしいから

人の目を

気にせずに

人の感情を

気にせずに

寝て

餌を食べて

息をして

でもそんな猫は

楽しいのかなと

思った夜

猫が猫で楽しいなら

別に良いけれど

猫になったら

夢は見られないのかな

努力は忘れてしまうのかな

愛する人の死に

涙は流せないのかな

空気を読んだり

相手を気遣ったり

朝はクマをつけて

起きたりして

自分へのごほう美に

甘い物を

食べて

生きている私

それって

幸せなのかもと

思った夜

辛いことは

いっぱいあるけれど

少しの甘みが

幸せなんだ

猫のおかげで

知れたこと

猫は可愛い

いやしてくれるから

人間も可愛い

生きているから

来世も

人間になりたい

短

歌

短歌

最優秀賞 沙羅の花落つ

横手市 佐々木 ヨリ子

今朝咲きし沙羅落ち続く夕つ方姉は逝きたり臥して三日目
酸素マスク外し姉の横顔が妣ははそつくりの写メール届く
姉のやうな死が来るなどと思はねど寝る前流しのシンクを磨く
日に幾度「帰れソレント」口ずさむ学校祭の姉を重ねて
遠き日の土産のテープ新盆の姉よ聴きませ「ノクターン遺作」
常に身を温ぬくとくせよと添へ書きの生姜糖姉の終の小包
妣ははの味に倣なひこの秋花寿しを送る約束茄子は漬けどき

奨励賞 夜半に目覚めて

秋田市 蓬 田 真 弓

頬に何か触った気がした 水瓶座流星群の夜半に目覚めて
わが胸の奥に眠れるごとくある蛍狩りせし家族の肖像
むせ返る夏の匂いの庭ありき つゆくさ向日葵グラジオラスの
年老いた父母が寄り添い見送れり夜行バスにて帰る息子を
歳月は誰の上にも平等に編まれゆくのか幸を織り交ぜ
コロナ禍の面会は疾く過ぎてゆく ガラス戸の先に母黙しいる
亡き父の誕生日には墓参り「今年も暑つちな。祭りがくるよ」

奨励賞 媪

大仙市 高 橋 岑 夫

独り居となりたるけれど媪らは野菜をつくり子に持たせやる
さみしいと口にはださず媪らはゑみをたやさず語り合ひをり
買ひ物へゆくにも医者へ通ふにも電動カートにてゆつくりと
畦わたる媪のあとについてゆくねこは先立つことのあらざり
朝仕事なし日中はそとに出ずだれもをらざるやうなしづけさ
畑仕事できなくなれば愉しみはデイサービスが日課となれり
竹やりを俵につきさす訓練をなしたるはなしかなしげにいふ

奨励賞 みどりきた来る

由利本荘市 熊 谷 すが子

触るるさへ危ふきまでのみどりごが繭籠もるごとく包まれ来る
抱かれて腕に眠れるみどりごの乳の香のする息のいとしも
みづからのいのち確かめぬるごとくもろ手頻りに虚空を握る
ひたすらに小さき舌を震はせて意志の確かな泣き声上ぐる
現世に宿る心地か身を委ねまなこを閉ぢて湯ぶねにひたる
ためらひて呼び初めし名に親しみて日日呼ばれつつみどりご育つ
帰りゆく娘とみどりごを憂ひつつ駆出しの父に託し見送る

入選 動物園

秋田市 森野奈津

ユキヒヨウにユキヒヨウの時流れいてヒトの私と目も交わらず
肉食のミーヤキャットの立ち姿見物人はいかに見えるや
炎天の動物園のトナカイを泳がせている飼育員愛
セザンヌのデフォルメ思うテナガザル樹上を渡る風と渡れり
ライオンも閉じ込められて強くあれ強さ見せよと求められおり
麒麟の目伏せて優しく人參をやれば長すぎ舌に驚く
象の檻人は楽々通り抜くヒトの周りの格子はありや

入選 村の子どもたち

上小阿仁村 高橋 充

登校の児童生徒は笑み語る友だちのこと将来のこと
色別は赤白だけの体育祭元気な子らが地域励ます
鮎放し歓声あげる子らありて未来大きく村も大きく
数足りぬ園児奮闘遊戯会ひとり数役みごとにこなす
単独で試合に出られぬ子どもたち合同チームで元気に駆ける
農産物品評会に出品の中学校が二等賞とる
おたがいの卒業アルバムに書き残す Do your best. Try your best.

入選 百年生きて

井川町 小林康子

一番目の夫のことをあの人とうあの人逝きて七十五年
天気よし今日は体も健やかとさやかな朝の母のつぶやき
いつの間にこんなに歳を重ねしか百年生きて自身に問えり
診察時つまずくんですと言う母も主治医もともに老人となり
午睡より目覚める母はわれに問う草津温泉はいずこにありや
次郎長の歌口遊ぶ母がいてわたしの中の音符が弾む
百歳をこえきし母は浴槽でわれにつかまりわれを氣遣う

入選 曾祖母となる

秋田市 佐々木 鏡子

あかときを受話器に息子の声はづみ遂にしてわれ曾祖母となる
米寿なる吾への賜物うぶ声も高らに男の子の曾孫生るる
胎内に在りし日すでに授かりし名をもち生れ来みどり児「創」は
マスクして出産せしやその顔に闘ひ了へし安らぎの見ゆ
ちさき手にいかなる夢のひそむらむ頻りにしやぶるまろき拳を
うつし世にマスク顔しか知らぬ嬰は抱かれじつと眼差し見つむ
よく眠りよく泣きよく飲み育ちあるアルバム届く生後ひと月の

入選 自分

仙北市 赤倉 聖来

あんきばん使わなくてもおぼえられるだつて何度も解いたんだから
努力の証ちびた鉛筆だけじゃない見てよシャーペンの芯あと一本
一度なら流行りのフワフワ氷もいい でも私はやっぱりシャリシャリ派
良い時間「時間よ止まれ」と言つてみる止まらないけど残る嬉しさ
数年後マスク外して「えっ誰だっけ」なるわけないじゃん親友だもん
「こんにちは」母が言うその相手とは我が家にいらした幼いコオロギ
幼き日流星に誓つた将来よ今もゴールを探し続けて

入選 今年の夏は……

仙北市 浅利 夏音

もうひとつつまむその手が止まらない自慢の枝豆食つてみてくれ
夏休み折り返し地点手つかずの山積み課題（ごめんね、先生）
コロナ禍でどこにも行けない日々続きたゆたう鳥さえ羨ましくて
コロナ時間携帯越しに祭り見る寝転びながらどこへでもワープ
弟に日記の良さが伝わる日いつ来るのかと問う母と我
近代化巷で増えたセルフレジ影に潜むのは人件費削減
盆過ぎて暑さやらぎ稲穂実り頭を垂れよう秋の私は

入選 男めし

鹿角市 高田 勝彦

真実の苦さに少し嘘を足すモカふうわりと躊躇い隠す
まばたきをするたび遠くなるひとよ病いも知らず渚駈けゆく
微笑の中でぽつんときよならが肩を窄めてはにかんでいる
一手間が二度手間になる男めし若し君いれば笑つたらうか
「いい人ね」ママに言われたスナックの片隅で飲むいい人のまま
酔いどれて結露に君の名を刻む悴む指に熱きもの落つ
春幾つ捲れど色褪せぬ虹のように微笑むアルバムの君

グリーン賞 目覚める

大仙市 高橋 那尚

春の朝小鳥が鳴いて起き上がる自然の中の目覚まし時計
目が覚めてあまりの寝汗にクーラーONも「冷えねえ」「あつちい」
猛暑の夜半頃
秋風が吹いても僕には心地よい新たな恋に早く目覚めたい
氷点下寒くてくるまる冬の朝母から起こされ渋々起きる
「起こしたじゃん」そんなの全然分らないだつてその時夢の中だよ
早朝に目覚めたある日の朝散歩五感で感じる季節の変わり目
起きぬけの何気なく言う「おはよう」に今日の始まり教えられる朝

俳

句

俳句

最優秀賞 信仰の園

秋田市 唐 一平

殉教の血潮に似たる紅薔薇
薔薇香る農衣姿の修道女
夜草刈りイエスに径を開けて置く
薫風で満ち溢れたる異人墓地
瞑想の園への小道小鳥来る
祈り終へ銀河見上ぐる修道女
獣道抜ければ絶景雁渡る

奨励賞 記念樹の桜

にかほ市 佐々木 亮子

記念樹の桜の下にありがとう
病む夫にことばを探す月朧
寄せ鍋やぽつんと残る夫の箸
まだ読めぬ看取りの日々の古日記
話さねば遠のく夫や螢の夜
凜として生きる約束石路の花
手を振って夫の来そうな大花野

奨励賞 夏の家

秋田市 七尾 理絵子

出戸浜のみな閉め切りし海の家
足跡の拇指くつきりと夏の浜
引き波の轟く音や夏旺ん
夏の海沖に天使の梯子あり
潮騒の音豊かなり夏の海
夏の日を弾く渚の真砂かな
出戸浜やどこに佇ちても大西日

奨励賞 通り土間

湯沢市 山田 草人

蔵の街包む野づかさ花林檎
鞘蔵の破風の飾りや風光る
水打つて蔵の背戸まで通り土間
乳神の銀杏黄葉の祠かな
爽やかや蔵に栄華の鍔絵紋
郷蔵は時代の遺産今朝の秋
この郷の何処を通るも林檎の香

入選 雄和路

秋田市 種村 聖巴子

どの家にも小さき社や南吹く
空の蒼露月の里は青田風
蒼翠の滴る山を歩きけり
遊ぶ児のなき公園や遠郭公
蒼天を独り占めして青りんご
青風杭一本の渡しあはと
噴水の音の尖りて風生まる

入選 鱈船

由利本莊市 佐々木 成

象潟の浜の寒風頬を刺す
綱元の土間に大きな囲炉裏かな
鱈船の漁場へと向ふエンジン音
鱈船を確と操る老い漁師
霊峰を目指し鱈船帰り来る
潮凧したたる鱈を神前に
鱈の鍋囲む円居や三世代

入選 魂鎮め

秋田市 石郷岡 由紀

奥処なる官修墓地や蟬時雨
観音の身丈の高し雲の峰
官軍につきし秋藩炎暑かな
丈低き名のみ墓や青胡桃
年少の小振りの墓前宝鐸草
討死と彫られし墓や草茂る
木洩れ日や蟬時雨とは魂鎮め

入選 盆の月

三種町 三浦 静佳

氾濫を繰り返す川盆用意
茄子の馬線状降水帯の下
魂棚や川の水位が気にかかる
墓参り空の蛇口の閉まらない
棚経をさえぎる雨よ病む地球
達観の盆僧の傘透き通る
雨雲の部厚く覆う盆の月

入選 幸せの刻

秋田市 石田 幸栄

修道女^{システク}と隣り合ふバス春の雲
吉相の柳眉のをみな雛祭
少年に遅れて少女花野かな
しあはせを頒^{わか}つ風鈴売の路地
墓参り生命線を濡らしつつ
幸せのにはひ纏^{まと}ひて柚子湯かな
霊験のあらたかな神初詣

入選 堰普請

五城目町 石井 美智子

朝まだき村一変の秋出水
流木の溜る橋げた秋微雨
秋霖や溢れし堰の暴れ渦
堀や普請を告げし掲示板
手分けて残暑の暇堰普請
鰯雲農具手に手に暇かな
水梨や結の衣服畦に座す

入選 祭

八峰町 浅田 英夫

村長^{むらおさ}の祭提燈高々と
夏祭^{なつまつり}どつと繰り出す三年^{みつとせ}かな
寄せ太鼓役者顔なる祭の子
娘らの胸はきりりと祭笛
男衆の破れ声神輿滝に入る
仮装する山高帽や父の夏
軒灯を残し車座祭後

入選 花火

男鹿市 三浦善隆

昼花火から人波の街動く
献血車下りて花火の棧敷席
尺玉やコロナの破滅願いつつ
強面なる花火師の耳ピアス
手花火のたまゆら少女妣に似て
花火師の労いに振るペンライト
海鳴りの終着駅や花火果つ

グリーン賞 妹

秋田市 佐々木友凜

靴散らし響くただいま夏の夕
青浴衣編まれた髪は姉仕込み
向日葵の波に攫われ隠れん坊
特別に母の紅差すこどもの日
甲子園憧れたのはチアリーダー
折り紙のビールを父に休肝日
真っ黒に日焼けた肌が眩しくて

入選 ふるさと

鹿角市 津谷郁哉

ふるさとの空広々と風薫る
初恋の人母親に夏祭
帰省子を見送る祖母の涙かな
ゆびきりをして別れたる秋夕焼
北風に背中へ更に曲がりたり
声色を忘るる友へ賀状書く
ふるさとを離るる人や春の風

川

柳

川柳

最優秀賞 いい眠り

秋田市 鈴木 明夫

ぬるま湯に浸かる男の曲がり角
左遷地で迎えてくれた義理人情
車座の対話ところが丸くなる
七人の敵に学んだ人生訓
八起目で掴んだボクの現在地
来し方に十指に余る詩がある
夢を見る赤子を抱きたい眠り

奨励賞 一粒の種

秋田市 菅原 浩洋

一粒の種が夢見る青い空
するすると豆の木のぼる子等の夢
野の香りつけて風の子今が春
人の背が恋しくなつて胸に花
帰ろかなコブシ咲くころ母の忌に
輪になつて笑顔で歌う里の秋
人ひとり泣いて笑つてみな花野

奨励賞 恋の数式

秋田市 川越 柳伸

曙光に新たな出会い呼ぶ予感
又とない恋を宿した雨宿り
深み増す笑窪に送る熱視線
告白へ妹頼みりハーサル
カラオケのデートに添えた愛の歌
友達の括りで返る愛の壁
定理さえ解けて解けない恋の式

奨励賞 愛の果て

由利本荘市 澤田 幸代

夫逝き阿吽の吽を持て余す
手のひらの鈴チリリンと愛の果て
雨の午後温い思い出だけ惚ぶ
独り居の平気よそおう親心
挫けるな挫けないわとボレロ聴く
気がつけばクスツと笑う日が増える
赤い糸下りてきそうな星月夜

入選 父の横座

五城目町 加藤 円心

鬼門抜け僕の時代を手に入れる
死に場所と決めた男の活火山
飯うまいまだまだ道は譲らない
経験を活かして傘になるつもり
遠花火良くも悪くも若かった
母に似た天使の愛に出る涙
下絵には父の横座があつた筈

入選 再生へのみち

秋田市 三浦千両

埋み火の夢のなごりが断ち切れぬ
土捏ねて捏ねて再起の登り窯
憧れの空へひこばえ真つ直ぐに
花びらに触れてカサブタほろり落ち
不束を包んでくれた日溜まりよ
ジャンプへの助走装具はもう外す
あたたかい民話を綴る再生紙

入選 黄昏

秋田市 小松隆義

夕焼けも小焼けもなくて黄昏れる
先に逝く話になると譲らない
ごはんですだけは聞こえる遠い耳
ハイ二つ重ねて不興買う返事
晩酌の二合が万病のクスリ
看る方も看られる方も要る我慢
無言劇先に笑った方の勝ち

エッセイ

エッセイ

奨励賞 栗の花

湯沢市 高橋 文子

トンネルの中は栗の花の匂いでいっぱいだ。むせ返るくらいだ。このトンネルに覆いかぶさるように広がる栗園の花が咲き始めたのだ。

小学校の体育館での朝の全校集会を思い出した。植物学者の教頭先生が、

「今、体育館に漂っているこの匂いは、何だと思いますか。」とみんなに聞いて、誰も答えられずにいると、

「これは栗の花の匂いですよ。」と教えてくれた。花は香りで、匂いは臭い、と思い込んでいた私は、「花の匂い」という言葉が少し不思議だった。その花の形状にも驚いた。体育館の後方にも、その横のグラウンドのかたわらにも栗の木が点在していて、大きく細長い黄色い毛虫のような花々が、ゆさゆさと風に揺れていた。

昭和後期の山あいの小さな小学校。周りを、広葉樹と針葉樹が美しく調和された山地帯の森林に囲まれていた。自然の遷移によつてつくられたブナやカエデ、ミズナラなどの

山に、建材などの利用目的でスギを植えたのだろう。小さな田んぼや畑が、人々の長閑な暮らしを潤していた。当時、全校児童は四十人程度で、三年生からは複式学級で学んだ。

体育館と隣家の畑との間には、多種多様な山野草が植付けられた一角があった。入口には達筆の「野外観察園」と書かれた看板が立てられていた。見上げるほどに大きく伸びたウドが、南国のヤシの木みたいに葉を広げていた。さまざまなシダ植物のそばでは、可憐な草花たちが次々と咲いては散るを繰り返していた。キケマン、キツネノボタン、ウツボグサ、ヤマオダマキ、ツリフネソウ……小学校低学年のあの頃、私は植物に興味を持ち始めた。家に帰ってから、両親に買ってもらった植物図鑑を開くのがとても楽しみだった。放課後の科学クラブの活動で教頭先生と一緒にいる時は、勝手に、自分が助手か弟子にでもなったかのような気分だった。教頭先生の大きな背中からはいつも、植物への関

心、もっと知りたい、見つけたいという感情があふれ出ていた。

運動会の朝には、校務員のおじさんが、空高く鯉のぼりを揚げてくれた。グラウンドは小さく、百メートル競走をするのに一周以上くると回って走らなければならなかった。当然、内側を走った子の勝ちだった。保護者や地域の人たちが参加する競技はどれも盛り上がった。おたまにピンポン玉を入れて走るお母さんたちには大声援が送られた。一升びんに水を入れて、片手で肩の高さまで持ち上げて耐久時間を競う「びんつり競争」には、先生たちも挑戦した。腕が苦しくなり顔を歪める大人たちが、苦笑いの末に次々とびんを置く中、最後に残ったチャンピオンには、満場の拍手が湧き起こった。大空を悠悠と泳ぐ鯉のぼりに見守られながら、そこにいる人たちがみんなが幸せな笑顔に包まれていた。一つの大きな家族のようだった。

小学校にはプールが無かったため、ある年の夏、先生たちで考えに考えた末、土のうプールを造ってくれた。グラウンドの一角に、コンクリートの塀が直角になっているところがあり、そこを利用した。縦横の対辺上に、

数えきれないほどの土のうを私の身長ほどの高さまで積み上げ、直方体の箱型を造った。

その中に特大のビニールシートを、ケーキを焼く時のクッキングシートのように敷き、川の水を汲み上げ入れてプールが完成した。今ほど夏が暑かったとは思わないが、プールの中はとても気持ち良かった。青空の青色は濃く、見上げた入道雲はまるで巨大な竜が口を開けているかのようにだった。

先日、テレビのクイズ番組で、嗅覚が五感の中で最も強い感覚であることを知った。匂いや香りは人の心にとっても深く印象を与え、長く記憶に残るそう。一つの香りが千以上もの思い出を蘇らせる、とも言われている。なるほど私の思い出は次から次へとあふれ出し、止むことを知らない。

時代が変化するスピードはどんどん加速し、それに比例して人口が流出していった。桃源郷のようだとはいえ聞こえは良いが、ここはすっかり過疎の村となった。山の裏側ではダム建設工事が始まり、随分と賑わっているようだが、ここに住む人々の毎日は、今も変わらずゆったりと過ぎている。光回線やスマートフォンなどの文明の恩恵もそれなり

に受けながら、身の丈に合った暮らしを続けている。特別なことはいらぬ。粛々と毎日を送ることの中に、本当に大切にしたい幸せがいくつもある。

もうすぐ裏山のヤマユリが大きなたつぼみを膨らませ、里山に夏を連れてくる。つぼみが割れて花が開いたときの、その匂いを思い出してみる。一輪採ってきて玄関に飾ろうか。そうすればあの日の体育館のように、家の中に花の匂いが漂う。名前を忘れた草花と出会ったら、植物図鑑で調べよう。本棚の一番左下にあるから。

奨励賞 竹の子

秋田市 佐藤 則英

北秋田市に森吉山高原キャンプ場がある。

ここは、かつてボーイスカウトが平成一〇年に日本ジャンボリーを開催した場所だ。私も中学時代に三年間在籍し、静岡県御殿場で昭和三七年（一九六二）に開催されたアジアジャンボリーに参加したことがある。旧阿仁町にあったボーイスカウトは、秋田県内で二番目にできた秋田第二団である。

このキャンプ場に北秋田市在住の小学校時代の同級生五人と秋田市在住の二人が集まって「竹の子汁会」をやるのは今年で三年目になる。

我々は昭和二四年度生まれで、「団塊の世代」（昭和二二年度から二四年度までに生まれた世代）の中でも最もしわ寄せを受けた世代である。「団塊の世代」という言葉は、作家の堺屋太一氏が同名の著作（一九七六年）でベストセラーになり今も使われている。

「団塊の世代」は、中学時代に一クラスに

五〇人以上が押し込められ、中卒時に「金の卵」と持てはやされて集団就職し、定時制高校に通っている人たちが沢山いた。我々の世代での大学受験は、史上最高の受験者数と言われ、その翌年には東大が安田講堂闘争で入試を取り止めている。大学に学園紛争が絶えなかつた時代である。

そんな七人のうちの三人が先発隊で竹の子の「根曲がり竹」を採りに山の中に入っている。山菜採り名人のT君に、M子さんとN子さんだ。あとの四人は、竹の子の採れる頃合いを見計らって午前一〇時頃に集合し、調理とテーブルの準備である。K子さんは膝が悪いので折り畳みの椅子を持参している。高齢者にはよく見られる光景だ。

ガスと水道設備は完備している。

そうこうしているうちに、汗びっしょりの三人が竹の子をいっぱい抱えて戻ってきた。

T君は「パンツまでびっしょりだ」と言っている。女性二人がよくもまあ付き合えたものだと感じる。まだまだ体力と若さがある。

早速、A子さんが竹の子の表面を削り取るように包丁で切込みを入れる。そうすると皮をむきやすくなる。生活の知恵である。H君

と私は膨大な量の皮むきの開始だ。

A子さんは、私と小学校一年生のときから中学三年までの九年間、ずつとB組で一緒だった方なので、それを知っているK子さんが「記念に二人でプレゼントの交換でもしたら」と言ったのが二〇歳の頃のことである。A子さんは手編みのセーターを贈ってくれ、私は新宿の伊勢丹デパート（当時）で人形を買って贈ったという淡い思い出がある。

竹の子は食べやすいように、根元に近い部分は切り落として捨て、更に根元に近い部分がある一節部分と柔らかい先の部分に切り分けて鍋に入れる。A子さんは「これは良い竹の子だ」と太鼓判を押している。大鍋に二つ分は優にあり、焼き竹の子も出来そうである。

鍋はみそ味で、竹の子に豚肉としらたきを一緒に煮込み、あとから持参してきた山菜のミズを一緒に入れる。ミズのシャキシャキとした食感がたまらない。

おにぎりと飲み物は、各自が持参することになっていて「竹の子汁」だけでも充分なのだがM子さんはキノコの漬物を一品提供してくれた。なかなかの美味だ。きゅうりの漬物もある。焼き鳥もある。

採れたての竹の子の柔らかい食感はたまらない。みんなでお代わりをして「竹の子汁」を堪能した。

食後のデザートは、各自が持参してきたものを出すのだが、ゼリー・ヨーグルト・バナナなどなど食べきれないほど出てくる。私は大福を提供した。

T君のガイドで秋田駒ヶ岳に登ったことのあるN子さんとM子さんが、男岳^{おだけ}への登山途中で暴風雨に会って遭難しそうになったという話は、今でも笑い話の種になっている。

もう一つの大鍋で作った「竹の子汁」はお土産用で、皮をむいていない竹の子は、焼いてよし、煮てよしのお持ち帰り用である。それに山菜のミズも加えてくれて優に二人分はあるし、焼き竹の子は酒のつまみにもなる。

竹の子の皮は、大きなごみ袋にいっぱいになっているが山にお返しした。肥料や土に還ることだろう。

また来年もみんな元気で会えるだろうか？ それにしても、みんな小学校の頃と顔立ちは少しも変わっていない。これは毎年のように会っているからなのだろう。何十年ぶりかで会う同級生とは全く違う。それぞれが地域の

環境になじんでいるのがうらやましい。私は馬齢を重ねているだけである。

「団塊の世代」の先鋒組は、後期高齢者に突入している。人生一〇〇年時代。

男女七人でこれからも秋田の自然を満喫していきたいものである。

奨励賞 小さな旅

心の色を微笑みに

男鹿市 畠山 信英

男鹿半島の北部最大の町だった北浦に嫁いだ伯母が亡くなり、退職後によく訪ねることができた。

石畳をわたり引き戸を開けると昔あった玄関戸は残され、杉の門柱と真新しい板塀は従兄の手作り作品だった。土間から続く黒光りする廊下には、田植型付機が置かれ手作業の時代を偲ばせる。

歌詠みの遺影の伯母は華やぎぬ

仏間に島木赤彦の歌

板張りの居間に大叔母の嫁入り道具だった箆筒が鎮座する。大正十五年五月に、北浦の大堤が決壊し大惨事が発生したという。この箆筒は、近くを流れる賀茂川から海に流され奇跡の返還を果たした災害遺産だった。

仏間には懐かしい伯母が微笑む。この遺影を囲むようにアララギ歌人の島木赤彦の軸と東海林太郎の達筆な色紙が飾られる。

男鹿島や残る土蔵の葛紅葉

母屋に隣接する荒壁の土蔵を覆い尽くす夕。壁面は紅葉し豪華絢爛な緞帳そのもの。なかに入るとひんやりして肌寒いほどだ。土間から二階への階段を上ると、屋号の入った桶や漁具がいくらか残されていた。一枚の静物画が蔵壁の返す光に浮かびあがる。絵心のある家族のだけかが描いたのだろう。なぜか聞きそびれてしまった。

庭には伯母が植えたナツメがたわわに実り、ユズリ葉の大樹の根元には石路の花が黄色に輝く。四季折々の花が咲き実をつける庭木は生家から運び入れたのだろう。ふつと季節の風に吹かれ和服でたたずむ伯母の姿が目に見え、浮かんできた。

伯母亡きあとの古い家は息子夫婦が守り続ける。驚くのは鳥小屋のリフォームだった。

二人は天井にスタレを張り、書架を構える現代風の書齋に一変させた。さらに広い土間の作業小屋は半分に仕切られ、高い天井の下には薪ストーブが置かれログハウスのようにも見える。ゆらゆら燃える薪ストーブが心をなごませる。丸太の椅子に置かれた原書の赤い表紙が反り返っていた。

この庵には、川のほとりにあって水がさらさら流れる音が聞こえるという楚辞から、潺湲かんていと揮毫されていた。従兄の流麗な文字の看板を眺めていたら、ふと書棚の「仁あり義あり、心は天下にあり」という書名が浮かび夢追人の隠れ家のように思えた。

日本海に流れ込む賀茂川沿いの裏庭には、父祖のなりわいを物語る船の大きな櫂が立ってかけられる。北浦は昔からハタハタ漁をはじめ漁業が盛んな街だ。それなのに、八郎潟周辺はちろうがたの教育や文化を学び聡明だった伯母は、嫁いってから漁業ではなく田畑を耕して大家族の暮らしを支えたというから誇らしい。

三十年後の老いのいきざま想ひ居り

眠れる夫の白髪抜きつつ

若い頃に詠んだ伯母の歌だという。光の中を歩む喜びに満ちている。伴侶も復員して落ち着いた生活を享受していたのであろう。

ところが、その後はなぜか不運に見舞われる。最も信頼していた伴侶の急逝、さらに自分も病に倒れるという最大のピンチがやってくる。窮地に立たされた伯母は、平気でいまを生きると決め、子どもの未来に夢を託し、短歌を力に困難を乗り越えていくのだった。

晴れて昭和五十八年十一月、男鹿市芸術文化章を受賞する。さきがけ新聞には、戦前、戦中、戦後を通じて農業と家庭を守りながら、女性歌人として地域の文化振興に貢献されたとあった。

平成十二年の台風十九号は、豪雨による被害が甚大だった。小さな村を守るため、私の一族をはじめ村人が総出で防災作業や警戒にあたった。その姿に心を打たれて書き上げた随想「無阿有むかゆうの郷のきょう」を、伯母はとてよろこび褒めてくれた。私は終生、「心なくして文章を書くことは出来ない」という手紙の言葉を忘れることはないだろう。

生きる証として短歌を詠み続けた伯母は、平成十三年七月に享年八十四歳の生涯を閉じるのだった。

幾つもの時代かけぬけし伯母のうた

アララギ歌誌に胸あつくなる

その年その年の人生暦がぎざまれた古い家と土蔵に囲まれて暮らした伯母の生活スタイルは、半島の人々の生きた時代をやさしく包み込む大らかさにあふれていた。

住む家を見ると、その人がどんな人であるのかがわかるという。今でも毎日のようにお

茶を楽しむ人が訪れることから、二人が伯母の遺志をついで居場所を解放しているからだろう。

私の小さな旅は、伯母の生きた時代をタイムスリップするころ旅となった。あの世の伯母を傍で感じながら、初めて俳句や短歌を詠むこの旅で、なぜか哀しみが微笑みに染められていくのを覚えた。

てのひらに伯母のことばをひらく朝

ほほむ色のつゆ草の花

逆境にあっても人への思いやりが出来る人は少ないだろう。弱音を吐かず何気ない平凡な暮らしを心がけ、人を慈しみ育むことを忘れなかった伯母の心の色は、きつと微笑みの色だったにちがいない。

時が流れても、男鹿半島の風景に溶け込む一軒の古い家。やさしくも美しいその姿は、

私の原風景そのものだった。

奨励賞 夜のしじままで

由利本莊市 阿部 美和子

シンとして音もなく、だれも深い眠りに落ちている。少しだけひんやりした夜が長く感じられてなんだか得した気分になる。この空間を独り占めしている優越感が漂う。

学生の頃からの習慣で、いつも通りまだ真夜中の二時過ぎにベッドを脱け出す。

お気に入りの店で購入したコーヒーを淹れて好きな作家の本を広げる。独特な表現と綴り方、言葉の選び方がなんとも、濃厚な味わいの仕上がり引き込まれ、余りに巧みな展開に、どうしたらこんなふうに書けるものかと、その妙味に思わず唸ってしまう。

PCにセットしたCDから聞こえてくる、雪解けの水が流れる溪流のせせらぎ。続いて小鳥たちのさえずり。深い眠りから覚めた早春の野山の清々しい息吹が充ち溢れる。

この春先、家の裏を流れる川に沿った農道に、まだはだら雪があつて傍らに若草が萌えそよ風に揺れていたことを思い出す。

本を閉じて、しばらくCDから流れる音色に聞き入るけれど、いつしか、すっかり色褪せた最後の景色に辿り着いてしまう。

喧騒の中にも、どこからともなく黄泉の風が吹いて、私だけが遠くに追いやられてゆくように強く背中を押され、自分を失くしてしまう。なぜか、そんな瞬間がふいに訪れ身動きができなくなってしまう。

それは、今さらと言うような夫婦のことであつたり、子どもとの関係であつたり、身近な間柄に生じたやるせない事だつたりする。

夫はいつだつて、1+1=2で、それ以外の答えはない。話は結論からで、そこに到る思いをめぐらして語ろうとしないところがあつた。人は其々で、時々か思いや考えや力量があつて、どんなに努力しても結果が得られない場合があることを理解できず、認められず、心の裏に寄り添うことを嫌つた。季節労働に出て他人と寝食を共にするなか、齢を重ね、漸く和らいできたように思える。

離れて暮らす子どもとの間にはいつからか少しばかり距離があるように感じられる。とにかく、自立を第一に育て上げることを急ぎ過ぎて、母性を欠いてしまったのだろうか、

悔む思いに駆られる。気丈な母との折々の関係性に戸惑うばかりの私のはずなのに。繰返されている現実には、はたと気づかされる。

片や、心の片隅に柵を巡らす、一通の手紙に始まつた事柄。なぜ？ 真意が分からず月日は流れ。果たして、あれが正義だろうか？ 情が薄れ、未だ恕心に遠い身が侘しく切ない。

CDから流れる「思いが叶う日」という曲に続いて「はじまりの空」という曲のヴァイオリンの高周波音にころがゆらく。

いつの間に、ひっそりと夜が明けてゆく。まだ薄暗いなかには儂げな虫の音が響きわたる。天逝した幼なじみかしら？ それとも八五歳まで生きた父かしら？ どうしようもない私を氣遣つてくれている、慰めのような宥めのような、そんな調べに思えてしまう。

庭先で秋風にコスモスの花がゆれている。朝食の準備には少し早そうだから、田んぼの間を巡る農道を自転車で、ゆつくりと、ゆらゆら気ままに走つてみる。

山裾を秋の草花が彩り、すぐそばに薄が湧くように群れ、野辺には淡い紅色の花をつけたサクラタデが頭を垂れている。

空は高く明るく耀きはじめ、遠くに鳥海山を仰ぎ見るも、今朝もその堂々たる雄姿に圧倒され、思わず手を合わせる。

終生不動の宿命。その重い掟を受け入れて共に連なる山々。自らを律し、至難の努力を語ることもなく、稜線を横たわる仏像の姿に映す。人もまた運命にしたがい、生きて行くしかないのだと、故郷の山々に諄々と諭され自省することばかりの身が悲しい。

昨日、買い物帰りに車窓からながめた海は金色の輝きがうすれ、蒼い秋の色が射しこんで、酷暑だった騒がしい夏の名残を滲ませていた。季節は構うことなく、留まりもしないで、遙かに螺旋を描いて巡っている。

いつしか大気も、人のこころも、奥深く清んで、落ちついていくだろう。

きつと、わたしも。そうでありたい。

夜には、仲秋の名月を愛でよう。

満月よりも十三夜月に魅かれる。

古来、満月に次いで美しいときれ、宴などが開かれたという。これから満ちる縁起の良月ともいわれ、秘かに、ささやかな希望と少しばかりの夢を抱かせてくれる。

通りを急ぐように往来する車の音。道路脇

の草を刈る機械のエンジン音が響き渡る。時刻を知らせる音楽が分け入って、不協和音ながら軽快に混じり合う、実に絶妙なタイミンで。いつもの朝の聞き慣れた音が、いつしか、光の粒になってポンポンと体の中を飛び交い、全身の細胞を目覚めさせてくれる。

漂渺たる空の下で、忙しい一日が始動し、必然とも、そのただ中に存在することがどこか彼方で決まっていた不思議さ、妙を思う。

いつかの折に、それがいつの頃であったのか、もう記憶も薄れ、曖昧さに包まれているけれど、予想した寿命にまたひと日近づく。

今日も身近な人達と言葉を交わし、ただふつうに暮れゆく、特別ななにかがやってこない、穏やかな一日でありますように。

生きる欲が無いわけでも、臆病な思いではないのでもなく、末一色となれるまで生ききる覚悟はあるのだから。もう躊躇も無く、目前の細く狭められた道の曲り角を一つ進む。

愚かにも独りきりを気どりながら、夜のしじまでたゆたい、幾つもの尖った感情のゆらめきを静めて、自分をとりもどしてゆく。

そこに咲いているだけで美しい花たちの命の輝きとその行く先に我身を重ね、着飾りも

粧うこともしない、素のままの私を愛しむ。

やがて、黄昏の光に包まれて、ふり返るもなかなか色々ありまして、それでも楽しい人生でしたと、しみじみして、満足の笑みを浮かべ、少しだけ讃えられたらと思う。

グリーン賞 感じて生きる

秋田市 佐藤 奈央

私。私ってどんな人なのだろう。私って何が好きで何が嫌いなのだろう。自分のことって一番知っているようで、たぶん一番よくわからない。私は今年21歳になる。20年間いろいろなことがあった。楽しいときも辛いときも一生懸命になったときもあったし、喧嘩したことも何もかも嫌で道路に寝転んだことも家族に黙って家出したことも食べ放題で気持ち悪くなるくらい食べたこともあった。そして死にたいと思ったこともあった。生きていてよかつたと思ったこともあった。そんな私は今看護師になろうとしている。もう子供とは言えない年齢にもなった。

大学の授業で学ぶのは健康のこと、命のこと、病気のこと、倫理のこと。うまく言葉にできないけれど、人はすごいと何度も思った。先日授業で長期入院している男児の発言が取り上げられた。先生は、男児に「一番大事なのは命と家族。人はいつか死ぬんだ

よ。」と、言われたと言う。私はその言葉に衝撃を受けた。男児の年齢は5歳。幼いながらに、この普遍的な事実に基づき言葉にできる。人は生まれてから死ぬまで、様々な経験をするとと思う。経験とともに年を重ね老いていく。老いていく前に何かしらの出来事によって亡くなってしまうこともある。人の最後は死ぬのだ。そうしたら、人生は経験で成り立っているのかもしれないと思った。

私は高校までずっと実家で暮らし、市内の学校へ通っていた。県外の大学へ入学と同時に実家を離れ、一人暮らしを始めた。実家を離れてみて気づくことがたくさんあった。親のありがたみ、お金の大切さ、人とのつながりというもの。当たり前だと思っていたことがなくなつた時に、初めて分かるということが体験した。お金を払わず出てくる温かいご飯、お湯がたまつた湯船、やりたいと望んだことができる環境、悩みを聞いてくれる友人の存在、数えても数えきれないほどの当たり前は誰かの存在で成り立っていた。それまでの私は生きていく世界が狭かつた、考え方が凝り固まつていたと感じた。幼稚園から中学校まで変わらないクラスの顔ぶれ、いつも

遊ぶのは固定のメンバー。特に大きく変化のない毎日だったけれど、今残っている記憶は良いものだ。女子グループでのおしゃべり、習い事の習字教室でもおしゃべり、テスト期間には文句を言いながらも友人と勉強会、うまくいかないとき嘆きながらも続ける部活動。何かに夢中になっているときって、もうそのことが人生を揺るがしてしまうのではないかつてくらい大きなものを感じる。辛くて辞めたい、逃げたいと思うこともたくさんあった。けれど、時間がたつて、そのものから心理的にも物理的にも距離が離れるとたいしたことなかったな、なんて思ってしまう。でも、夢中になれるって素晴らしいことだなんて思う。なんでも、本気でやるとうまくなりたい、上へ行きたいと思つて努力をする。楽しいだけではないけれど、時間を忘れてしまうくらい夢中になる。それはほかの誰かが「無駄だ」「意味ない」と言つたつて、聞く耳を持つ必要はないと思う。だって自分が夢中になれて楽しいのだから。これは私の人生で、私の時間を使いたいと思えることだから。大人に近づきにつれて、辛さを感じないために期待をしなくなり、物事のメリット・

デメリットを見て判断するようになった。これが大人になるといふことで、成長するつていふことならば、私は子供のままでいたいと思つた。後先考えずに挑戦することができた子供の頃がよかつたな、なんて思う。しかし、子供のころは早く大人になりたいと言つていた自分を思い出し、そういうものなんだな、と面白く感じてしまう。最近ふと、人生の時間は有限であるといふことを改めて実感した。分かつていた。分かつている。けれど、感じなかつた。

看護の勉強をしていると、生きることや死ぬことについてよく考える機会が多い。自分以外の誰かの人生について考える。生まれたころから病気を持った人には行動の制限があり、些細なことのように思えることがその人の幸せであつたり、願望であつたりする。外で思いつきり走りたい、冷たい氷水を飲みたい、好きなものをおなか一杯食べたい、家族に会いたい。誰かにとつて当たり前のことだが、誰かにとつて望んでも叶わないことだつたりする。そんな事実はいつたどれくらゐの人が認識しているのだろう。病院を出たら、世界にはまた違う組織が山のように存在

して、その中で人間関係は構築され、悩み、苦悩、葛藤の中で生きている。自分より恵まれていような人の一部分を見てその人をうらやみ、自分の生活に不満を抱える人はどれくらいいるのだろう。反対に自分の生活に満足し、毎日幸せに生きられている人はどれくらいいるのだろう。そして、そもそも幸せつて何だろう。

幸せつて何だろうと考えても、ここで述べることが出来るのは私にとつても幸せ。幸せには形や定義もないらしい。自分が思つていふことが相手も同じとは限らないし、自分にとつての常識が相手にとつての常識とは限らない。今に至るまでの時間、何を見て、何を聞いて、どんな経験をしてきたか。経験によつて作られた個人のすべてを明らかにすることは不可能に近いのではないか。だからこそ、過去の経験を振り返つてみることは自分のことを知ることにつながるのではないか。どのタイミングで振り返るかによつて、過去の出来事は捉え方が異なることもある。記憶は容易に変えられてしまう。今の私が過去を良いものにとらえられているのは、今の私が今に満足しているからだと思つた。確かにつ

らいこともたくさんあつた。けれど、それも含めて私の人生だと思える。これからどんな出来事が待っているのか、想像がつかない。けれど、私は私の人生を生きたいし、自分に素直に、誠実でありたい。

最優秀賞受賞のしとじば

ウクライナへの手紙

詩部門 深町一夫

前略

十年前の秋。

私は南相馬市立中央図書館の前で、ウクライナから届いた子供達の絵手紙を読んでいた。その温かく心のこもった手紙は、チョルノーブイリ原発事故を体験した国民として福島第一原発事故の当地への愛で溢れた物でした。

この年2012年の福島県は事故から1年が過ぎたとは言うものの、原発から10キロ圏内へは検問をパスしなければ、立ち入る事の出来ない日常の中がありました。

十年後の現在。

ロシアのウクライナ侵攻に因り、チョルノーブイリやザポリージャの原発は占拠され、度重なるミサイルの砲撃を受け、外部電源さえ失う危機の中にあります。

この十年、私は原発事故の被災地を歩き続け、詩や短歌に記録して来ました。そして今、ウクライナの国難を詩の表現としてここに伝えられる場を戴けた事に感謝するとともに、決して世界大戦のカタストロフィに陥ることの無い明日を願う者です。

草々

令和四年十月十二日

モニタリングポストの数字赤きまま

十年後も今を照らせり

鈴木 仁

沙羅の不思議

短歌部門 佐々木 ヨリ子

昭和四十五年数種類の庭木が植えられ、「気品のある花が咲く」と告げられた舅は、一向に咲く気配のない木に、来年こそはと期待をかけた続けていた。

五十五年一月舅が亡くなり、六月に二輪の初花が咲いた。凶鑑に花の名を調べ、夏つばき、別名沙羅と知り、花を見ずに逝ったこの不思議な現象に、以来「舅の木」と位置付けている。一日で咲いては落つるを繰り返す白い沙羅の花が大好きになった。

今年も例年にもまして、うつつらと冠雪を思わせる様に咲き、朝々木下を真白くする落花に心を馳せた。六月二十三日の夕べ姉の訃報を受け、その死を素直に受け入れていた。新盆の近き日に一輪返り咲いた事も不思議であった。沙羅は紅葉を始めている。

この度の受賞に際してお世話して下さいました多くの方々にお礼申し上げます。

何はともあれ感謝！

俳句部門 唐 一平

私事ですが、

青春の一断片として、聖職を志し宗教学を専攻した時期も御座いました。

しかし、生来の定着性の無さ・流浪癖故に次々と学府を替え、専攻を替え、終には常軌を逸した得体の知れない流転の摩訶不思議な存在になってしまった感がありました。

一方、その流浪癖故に、日本そして世界の隅々まで股旅する結果に誘われました。

又、贖罪意識が心底にあったからでしょうか、その都度、寄留先の教会や修道院を訪ね、懺悔を兼ねて説教と助言を賜って参りました。

現在、それなりに生かされて居ることに感謝し、取り留めなくポジティブに過ごしております。

受賞にあたって

川柳部門 鈴木 明夫

定年後の身の振り方について、如何に余生を充実させていくかを考えていました。先ずは健康のために継続的に運動をすること、それに野菜作りやボランティア活動等を実践することでそれなりの充実感を得ていました。

私と川柳の出会いには三年前、銀の笛吟社の方から誘いを受け、この世界に足を踏み入れました。戸惑いもあったのですが、多くの方々の支えもあつて今日に至っています。

賞をいただいた句は、自分の生き様を表現したつもりでしたが、受賞の連絡を受けた時は本当に驚きました。長生きをすれば、このようなご褒美をいただくこともあるのだなと感じているところです。

このたび選をいただいた諸先生方には深く感謝を申し上げますとともに、受賞を機に日々研鑽を積んでいきたいと思っています。

小説・評論



大原 かおり

「表記」の効果

今年度の応募作品9作品を読んで考えたのは「表記」の効果である。作品を読む際は、ひらがな・カタカナ・漢字表記の違いから意味を読み取ろうとする。意図があつての違いなのか、単なる誤植なのか。その戸惑いがない作品世界への没頭を妨げてしまうのが気になった。同時に、文字の視覚的な印象が与える影響も改めて実感した。ひらがな・カタカナ・漢字、旧字体と新字体、記号などの表記の与える印象は、正しさはもちろんのこと、手書きやフォントの印象以外にも作品世界を演出する要素の一つになっているのではない

だろうか。

奨励賞受賞作品「暖鳥」では、空の覇者イヌワシの威厳と孤独、冴え冴えとした山の空気が伝わってきた。空の王と称されるも、足下を温めるといふ「暖鳥」を必要とするほどに老いたイヌワシと恐れを知らないマガモとの交流が、イヌワシの生涯の回顧につながる。その後のツキノワグマの温もりを伴う回顧と、異にかかった彼を助けるカモシカとの交流も表記の使い分けによって緩急が生まれている。

ただ、イヌワシとマガモ、クマとカモシカの二つの物語の接点が腑に落ちなかった。本文中にある、彼らの営みが領域を侵すヒトを一掃する雪崩を起こしたとも、山の意思が雪崩を起こしたとも受け取れる解釈は、直後に「どうでもいい」と否定されるが、この部分を読んでかえってモヤモヤが生まれた。

グリーン賞受賞作品「歳を取らなくなった君と」は、心身に深い傷を負った少年たちの抱える心の重さを描く。胸の底を這うような思惟を表現する言葉は慎重で、重さが伝わってきた。けれども、読むことを度々妨げたのは、会話であった。誰の台詞なのかが分かり

づらく、行きつ戻りつ読んだ。

また、この作品に限らないが、キラキラネームばりの当て字にまだまだ馴染めない者としては、平素からこの手の名前に尻込みしてしまう。「ライト」な作品ではもはや当たり前なのだが、氏名の表記からも非日常性を感じ取ってしまう身としては、どのモードで読もうかと戸惑いを覚えた。時代遅れの誹りを受けてしまうが、これも率直な感想である。

惜しくも受賞を逃した作品「梵天」は、ふるさとに帰ったはずなのに孤独と焦りにさいなまれる主人公に訪れた「楽しい一冬」の出来事を描く。地元ならではのしがらみからかけ離れた二人の交流場面は楽しく読めた。けれども、最後の種明かしの方法とその意味するところの解説は腑に落ちなかった。主人公のいう「幻の短編ドラマ」とするならば、圭助さんの存在のあやうさを示す伏線があつてもよかった。読者としては作品を読み返して伏線を回収する楽しみがほしかった。

その他の応募作品からも、その土地ならではの習俗、受け継ぐ者の悩みと矜持、野望と諦念、史跡に潜む謎など、秋田の地で生きる

人々の有り様が伝わってきた。「あきたの文芸」ならではの評論、物語の舞台や設定、実在する対象やモデルをイメージしながら読み進めるのは楽しくもあり学ぶところがあつた。世代は違つても秋田に住む者として、懐かしさやくすぐつたさを共感できるのは嬉しいものだ。



体験談でも物語でもなく小説に

山崎 義光

一〇代から八〇代まで幅広い年代の方々から応募がありました。物語られる世界のディテールと設定された年代から、著者の年齢年代を彷彿とさせるようなところがありません。 「あの頃」のことを題材に、自分がよく知っている場所や時代のことを書いてみたくなるのでしょうか。自分が経験して感じてきたこと、よく知っている知識などを活かして細部がしつかりと書かれていることは、小説の大きな魅力です。ただ、それだけでは創造的な作品、読ませる作品にまで達するには足り

ず、思い出話の域を出られません。定型的常識的な物語のパターンにはまり込んでしまうことなく、題材を活かしながら、背景と前景化させる人物の関係を精細緊密に描いて固有の創造性の魅力を備えるところまで達することができるとか、発見的で問題提起的な局面が描けるかどうかが大事だと思います。そういう点を評価の基準におきました。

受賞作「暖鳥」は、人間ではなく、イヌワシとマガモ、ツキノワグマなどおもに自然界に生きる動物を描いた作品でした。題名は厳冬の冬に体を暖めるため他の鳥を捕らえて暖をとるといふ、冬の季語として知られる言葉のようです。厳しい環境と弱肉強食の中で生きる動物たちを、焦点を変えながら物語ったところが本作の読みどころでした。こうした物語も童話では珍しくありません。ただ、その場合、物語る人のもつ観念に引きつけて語つてしまうと定型的常識的な人間の物語におちいつてしまいがちです。終わりの方でその傾向が出ていたように思いました。人間の観念に収まらない世界観が出せるとさらによかつたと思います。

入選は逃しましたが「梵天」は、父の病氣

を機に帰郷して地元で働く「私」を主人公に、梵天祭りの準備にかかわる出来事を描いた作品でした。父の同級生で、かつては養豚家として頭角を現しながら、失敗して地元を離れていた圭助さんと出会い、祭りの準備にかかわる姿を描きました。時代の変化にともなう地域社会の世代間ギャップ、父の記憶を喚起する圭助さんへのほのかな敬愛が、失われていく習俗にかかわる丁寧な描写ともに描かれた佳作でした。

この他、「届いた「おにぎり」」や「明日の景色」なども、日本社会全体の変化が、仕事や住む場所、世代間や男女間、地域での暮らしの様子の中に織り込まれて描かれていました。社会変化の中に条件付けられた生活環境や仕事、人との関係の中で生きる姿をどのような目線で固有に描き出せるかというところが難しいところだと思います。土地の歴史に目を向けた評論として久保田城と風水のかかわりを探究した「風水で選ばれた久保田城の立地」も興味深く読みました。自らの発見的な興味そのものを前面に押し出して探究する姿勢がよく出ていて、小説仕立てにしてもよいと思えました。

もう少し現在に近い世代を登場人物にした「世界の終わりはサンデー」「歳を取らなくなった君と」は、ともに親密な周囲の人たちとの関係を描いた作品でした。ある日突然宇宙からの攻撃のニュースが飛び込んできたという、SFで馴染みの「地球最後の日」という設定で描いた「世界の終わりはサンデー」は、未来から切断されたときに思い描く幸福な家族や友人との関係を描こうとした作品だったように思います。いわば涅槃の場所として選ばれているのが遊園地ということでは現代的で、もう少し現代性を多角的に描き込めるとよかったと思いました。それとは対象的に「歳を取らなくなった君と」は、家族とは別の形で支え合う生き方を表現しようとした作品だったと思います。家族が崩壊し行き詰まった苦界としての社会に心理士となつて「明日」を生きようとする人物を描きました。事件やつらい経験を通じて抱える心の傷が背景となり、前景化される人物像や人間関係に奥行き与えて描こうとしたところに書き方の工夫と可能性があつたと思います。



核心部分を どう伝えるか

加賀谷 真 澄

五年ぶりに「あきたの文芸」の選考委員を務めた。久しぶりに読む応募作品は、いずれも構成力・表現力において優れた点を持つていると感じた。その中でも、物語の核心を力強く伝えることに成功している作品が、受賞作として選出されたと思う。伝えたいテーマをブレることなく最後まで描き切るのには、根気と技術が必要とされる作業である。

さて、今年は奨励賞一作品とグリーン賞一作品が選出された。奨励賞の「暖鳥」は三部構成から成る。一見すると、森に棲息する生き物たちを個別に描いているようだが、最後の場面でそれらが有機的に統合され、人間を超える大いなる自然として迫ってくる。森の主は動物たちであり、人間は静寂を乱す侵入者でしかないことが示される。静かな語り口と森のダイナミズムとの対比が効果的である。巧みな構成であるが、各部のバランスを整えることで、よりシャープに仕上がるので

はないかと感じた。

グリーン賞の「歳を取らなくなった君と」は、生への執着が希薄な少年二人の絆を描いている。かろうじて生につながっていた二人だが、一方は生を選び、もう一方は死を選ぶ。その差はどこから来ているのか。また、死にゆく友人を見送った少年の心情は、どのようなものか。掘り下げるべき点がいっつかあるように思われる。若い作家なので、これからの挑戦し続け、魅力ある物語を紡いで欲しい。

この他、惜しくも選外となった作品についても触れたい。「われ生きる故にわれあり」は、少年が困難を乗り越え、大人へと近づく瞬間を描いている。少年にそのきっかけを与えた人物に魅力があるので、その背景をもっと知りたいと思った。

「梵天」は、主人公と地元の落ちぶれた男という組み合わせが面白い。二人で梵天を奉納する場面は、土地と人への愛着と慈しみが、心の叫びとなつて表現されており圧巻。他の描写を抑えると、その良さが際立つのではないかと思う。

「風水で選ばれた久保田城の立地」は、城

の立地を風水の視点から読み解くもの。歴史的背景の解説は詳細で厚みがあり、秋田の歴史とその魅力に、改めて気付かされる。評論スタイルなので、導入からすぐに本題に入っても良いのではと感じた。

「明日の景色」は、登場人物たちが非常に人間臭い。彼らのあからさまな欲望や失敗にクスツと笑ってしまうような巧みな筋運びである。女性もクセのあるキャラクターなので、それをもっと生かす場面を見たいと感じた。

「春の嵐」は、楽しい山登りが一転して死の恐怖と対峙することになる物語。死に最も近づく時が、生への欲求が沸き上がる瞬間なのであろう。全体的に丹念な描写だが、重要な吹雪の場面に比重を置いて良いと思う。

「世界の終わりはサンデー」は、地球最後の日の過ごし方を描いている。皆家族や友人との時間を選ぶのだが、平穏な日常こそがの上なく貴重だということであろう。物語の展開の種が複数あるので、ストーリーをもっと動くのをみてみたい。

「届いた『おにぎり』」には、農業一筋に生きた父への思いが描かれている。田畑を簡

単に手放せない心情は、誰もが共感できるものだろう。農家を続ける覚悟を決めた時の、心の動きを詳しく知りたいと感じた。

どの作品も安定した筆致で描かれ、テーマも良い。ただ、ハイライトとなる場面を描き切った作品となると、多いとは言えない。限られた字数の中で、物語の頂点までの道筋や、その場面を輝かせる工夫が必要だと感じた。

今回投稿された方々には、得意なテーマや文体があると感じられる。これからも描きたいものを描き続け、創作する上での強みを磨いて欲しい。

(秋田県立大学)

詩

選評



佐々木 久春

表彰の対象作品について審査に当たったわれわれの意見が、ほぼ一致していたのは当然とはいいながら嬉しかった。

最優秀賞の「ホリゾントライト」は素晴らしい作品だった。一篇は、「たとえば／それは一枚の切符」という軽い「喩」で始まる。三行目の空白行を置いて四行目「Feb 24, 2023」と、ああ「ロシアのウクライナ侵攻」だな、と舞台が明確になる。その現実の場・詩の第三段以降は悲しくも美しく描かれる。「心のスケッチブックを開き／光のペンで書きとめる」と言う描写は美しい。だんだんと史的事実がはつきりしていく。しかし用いる喩は繊細でしかし明確である。五連目おわりの3行、「野に咲く花の名前さえ知らないままに／みずからも乗る方舟を／壊し続

けるのかもしれない」という表現は見どころがある。その思考は拡散せずに最終二連に結晶する。「現実」と「イマジネーション」と「個」が一篇を詩としている。

*

奨励賞の三作品も、それぞれ作者の思いを描いて鮮やかだった。——灯台と父の思い出、何、かがのこつている、何か忘れた。岬のもどり道、落とし物かと拾いかけたのは「岬の風に根を張って岩間に咲いた」スミレの花だった、と「草の岬」をうつつ。「森の書店」では豊饒な物語や詩のありかを語る。「ラインの黄金」では、実は二人は違う方向を向き旋回する針として続いていく道を回る。

入選の三作品「紫陽花」「青い トマト」「手帳」は、図らずも暮れ行く老年が描かれている。しかし、三作品とも嘆くことなく、悟りきることなく現実を描いている。

*

応募状況をみると毎年のことだが、短詩形

学のうち俳句、短歌、詩の順序にこの五年間で俳句は詩の2〜2.5倍ほど、短歌は同じく1.5倍〜2倍ほど多い。俳句は「俳句甲子園」が地方大会、全国大会と盛んなせいかと思えばそればかりではなく、この「あきたの文芸」では60代から70代が前記の倍率を示している。いずれにせよ俳句や短歌に詩は及ばないようである。

しかし、十代の人の「詩」の応募が、他どのジャンルより多かったのは今年の特徴であった。グリーン賞の今後に期待したい。

*

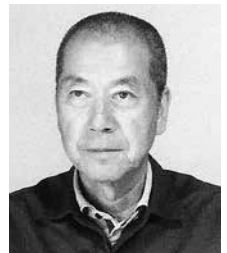
総じて期待するのは、まとまったうまい作品ではない。少々まとまらなくとも破天荒の兆しの見られる作品を望みたい。大胆で闊達な抒情を望むのだが、これは選考委員のわがままであろうか。

住所 秋田市広面字板橋添10の1

所属

日本詩人クラブ、秋田県現代詩人協会

詩同人 北五星



起承転結を
もう一度

成田 豊人

日本が新型コロナウイルスに襲われて三年目の秋になっても、まだ感染者数は大きく減ってはいない。さらに、今年の二月下旬にはロシアがウクライナに軍事侵攻を行い、愚かな戦闘行為は未だに終わる兆しさえ見えない。あまつさえプーチン大統領は核兵器の使用も仄めかしている。こういう状況が応募作品にどう反映されているのかも頭の片隅に置きながら読ませて頂いた。よし悪しは別として、意外な事にコロナ禍も戦争にしても取り上げられている作品は少数だった。まだまだ心の中で整理がついていないのかもしれない。

全体的な感想としては、構成が少し雑な作品が目立った。基本である起承転結をもう一度意識してみる必要があるのではないか。

応募作品数が少なくなっているが、特に若い人々の斬新で自由な表現に期待したい。

今年度は久々に最優秀賞に該当する作品が

出た事を嬉しく思います。

最優秀賞 ホリゾントライト

ロシアの軍事侵攻がモチーフとなり、歴史上これまで何度も繰り返されて来た戦争という愚行を、新鮮な表現で決っている。ラスト二連で描かれた何があっても希望を失わないという姿勢に、責任感の強ささえ感じた。

奨励賞 草の岬

岬はかつて父親と共に訪れた場所。過去と現在を対比させ、情に溺れず人生を顧みる。その間に「無防備に過ぎた歳月のすき間に／置き忘れてきた大切な何か」を自問する。最終連は作者の人生を象徴し、印象に残る。

奨励賞 森の書店

森を書店と見立てた点がユニーク。森の持つ自然の力が的確な描写と比喻とで、心地良く伝わって来る。特に三連目の「失われた時間／継ぎをあてられた時間が／豊穡な物語に書き換えられ／積まれている」が印象的。

奨励賞 ラインの黄金

お互いを想う心が一つになっていると実感はしていても、時には違う方向に向かつてしまい、将来が見通せないという焦燥が如実に伝わって来る。二連目と五連目はほぼ同じ内

容だが、繰り返す必然性はあったのだろうか。

入選 紫陽花

しつかりとした構成である。紫陽花の鮮やかな色彩が高齢の父の死を素直に受け入れさせ、大病後の回復と父への感謝の気持ちを促す。四連目の死生観とも言える描写が潔い。

入選 青い トマト

ユーモラスな筆致で野菜栽培を通して、老夫婦の思いやりの深さが伝わって来る。四連目の最後の一行「今さら 言えないのだ」が効果的。最終一行は必要だったのだろうか。

入選 手帳

約五十年に亘って予定を記して来た手帳が約五十冊。人生の終わりを見据えて処分を考えるが出来ない。生きて来た証しを消す事になるからだ。記録の重味が伝わって来る。

グリーン賞 女の子の日

成熟した女性になる前の「女の子」としての存在の悲痛さが、皮膚感覚を伴って伝わって来る。「私の子宮が泣いている／真つ赤な涙を流している」の二行が特に強烈である。

グリーン賞 十八の音

十八歳になるまでの経験を、音にポイント

を絞って表現したのはユニークだった。その経験を具体的に十八箇条書き的に書いてあるが、やや月並みな経験となつたのが残念。

グリーン賞 舞台袖ロマン

本番直前、舞台袖での出番を待たつた十秒間の自信に溢れた心の動きを、小気味良く描いている。「指の先、足の先までもが花弁／舞台の華、それが私。」が特に光っている。

グリーン賞 猫と私

自由奔放に生きてるように見える猫から、辛い事があっても普段の生活の中に幸せがあるのを学ぶという心の成長が描かれている。構成をもう少し推敲するとさらに良くなった。

* 奨励賞以降は受付順でコメントを付した。

* 詩誌「komayumi」同人

* 秋田県現代詩人協会会員・日本現代詩人会員



思いを深く 掘りさげて

寺田 和子

COVID-19第七波がようやく落ち着く

かと思われる昨今、インフルエンザの流行と第八波が重なるのではないかとの声が聞こえてくるようになった。加えて、ロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まって七ヶ月余、いつ止むもしれない状況下にあつて、詩を書き続け応募してくださった方々に心からの敬意を表したい。

今回の応募数はこの五年間で最も少ない32編。「20代・30代がゼロ」には衝撃を受けたが、10代が多かったのと初応募が四分の一であつたことに希望を繋いでいる。選考の結果は次の通りである。

〈最優秀賞〉 『ホリゾントライト』

ロシア軍がウクライナに侵攻して一年後の2023・2・24、ウクライナに到着し、「ひとりの農夫となつて麦の収穫を始めるだろう」と夢みる作者。題名からも仮想と分かるのだが、その時、戦いが終結しているかど

うか予測がつかない今、その場に立てない私たちはひたすら平和を願つて祈るほかない。

〈奨励賞〉は三編である。

『草の岬』 時の経過も含めて過不足なくまとめられていて、入道崎の情景が浮かんでくる。

『森の書店』 第一〜三連までやや説明的である。題名のつけ方、助詞の使い方、具体的なものをどう取り入れるかなど、推敲の余地がありそうだ。

『ラインの黄金』 ワーグナーのライフワーク「ニーベルングの指輪」の「序夜」の題名「ラインの黄金」。壮大な楽劇の題を借りての本作は、未知の未来に向かう若者の愛の詩か。第一連・第三連の「それぞれに追いかけていく」の表現に心ひかれた。

〈入選〉は三編である。

『紫陽花』 おおむね過不足なくまとめられているが、「青天の霹靂」には違和感を覚えた。他の表現はないだろうか。

『青い トマト』 独り語りふうにまとめられていて、長年連れ添った老夫婦の息遣いが伝わってくる。最終行はない方がよいと思つたがどうだろうか。

『手帳』 五十冊の手帳にこれまでの五十年をふり返る。思いが溢れるほどあつて当然だが、全てを盛り込むことはできないので、本当に伝えたい芯になるものは何か掘りさげることが必要になる。

〈グリーン賞〉は四編である。

『女の子の日』 読み手が思わず引いてしまうようなストレートな表現が次々と繰り出されるが、常日頃、ただ耐えるしかない理不尽さに対してそれほど強い怒りや深い悲しみを感じているのであろう。

『十八の音』 十八種類の音を挙げ、それら全てを己の中に抱え、受けとめての成人宣言である。

『舞台袖ロマン』 舞台袖で待つ十秒間の心のドラマを表現。

『猫と私』 たんたん猫と自身の日常を綴りながら等身大の自分を肯定的に捉えた。

選考を通して全般的に推敲不足であると感じた。それは表記だけの問題ではなくて、言葉にする以前の問題―自分自身の思いをどこまで深く掘りさげているか、ということである。私たちは日々の生活の中で様々な体験を

し、精神的・心情的にいろいろな思いや感情を積み重ねてゆく。放っておけば消えゆくものもあるだろう。喜怒哀楽、その狭間に揺れる思いもあるだろう。そうした思いを大切に思うならばそれにふさわしい言葉を探すに違いない。時間はかかるが、その時間は詩が生まれるために必要な時間なのである。

今回の選は私自身初心にかえるよい機会となった。感謝の思いとともに、同じ詩を書く者として精進を重ねていきたいと願っている。来年の再会に期待をこめて。

詩誌「歷程」「密造者」同人
秋田県現代詩人協会会員

短歌



福岡 勢子

選歌を終えて

最優秀賞 「沙羅の花落つ」

○今朝咲きし沙羅落ち続く夕つ方姉は逝きたり臥して三日目

○姉のやうな死が来るなどと思はねど寝る前流しのシンクを磨く

○常に身を温とくせよと添へ書きの生姜糖姉の終の小包

「沙羅」は「夏椿」とも言われ、夏に咲く

白い椿です。清楚で慎ましやかな亡き姉を彷彿とさせます。深い悲しみを花に寄せて余情を出しています。二首目は自身の生き方を問い直す作品となつている。三首目には亡き人の人間性も出ております。思い出と現実を交錯させながら、亡き姉を思う構成が素晴らしいと思います。

奨励賞1 「夜半に目覚めて」

○頬に何か触った気がした 水瓶座流星群の夜半に目覚めて

○わが胸の奥に眠れるごとくある蛍狩りせし家族の肖像

○コロナ禍の面会は疾く過ぎてゆく ガラス戸の先に母黙しいる

一首目、夜半に何かが触れた気がしたり、呼ばれた気がして目覚めることがある。流星群の流れる夜であったことをよび出すあたり

詩的である。二・三首目は家族の思い出や、母の切なさが伝わる。

奨励賞2 媪

○独り居となりたるけれど媪らは野菜をつくり子に持たせやる

○畑仕事できなくなれば愉しみはデイサービスが日課となれり

媪達への視点が温かである。年配の方々のデイサービスへ通うことが、新たな楽しみとなつており、生き方が変化してきていることも何わせてくれる。

奨励賞3 みどりご来る

○触るるさへ危ふきまでのみどりごが繭籠もるごとく包まれ来る

○ひたすらに小さき舌を震はせて意志の確かな泣き声上ぐる

お孫さんの誕生であろうか、一首目も二首目も具象でもつて、みどりごの様子を表出している。「繭籠もる」や「舌を震はせて」など独自の視点がある。

入選 動物園

○セザンヌのデフォルメ思うテナガザル樹上を渡る風と渡れり
ユキヒヨウや麒麟やライオン、トナカイや

象なども独自の視点でとらえている。

入選 村の子どもたち

○色別は赤白だけの体育祭元氣な子らが地域
励ます

過疎地の村の子どもたちの様子を読んでい
る。よい面を見つめている。

入選 百年生きて

○百歳をこえきし母は浴槽でわれにつかまり
われを氣遣う

百歳になっても息子を氣遣う母の心情が豊
かである。自宅での介護に感動する。

入選 曾祖母となる

○米寿なる吾への賜物うぶ声も高らかに男の子
の曾孫生るる

曾孫の誕生を手放しで喜んでい。自身の
長寿へのお祝いのもようでもある。

入選 自分

○数年後マスク外して「えっ誰だっけ」なる
わけないじゃん親友だもん

口語発想の作品で、若さが光っているよう
だった。

入選 今年の夏は

○コロナ時間携帯越しに祭り見る寝転びなが
らどこへでもワープ

若い人の作品のようだ。コロナ禍でも上手
にリフレッシュしている。社会への視点あ
り。

入選 男めし

○一手間が二度手間になる男めし若し君いれ
ば笑つたらうか

妻を亡くされた男の心情が、情に流されず
作品化されていた。

短歌結社「好日」編集委員。日本歌人クラ
ブ会員。県歌人懇話会理事。



タイトルから 見えてくること

伊藤 寛雄

短歌部門には六十一作品、四百二十七首の
応募がありました。入賞作品の選評はお二人
の審査員の方が詳しく書いてくださると思
います。私としては応募者全員の歌から一首か
二首とりあげ鑑賞したいのですが紙数が足り
ません。そのため、ここでは応募された皆様
の歌とタイトルを読みこみ「アー、こんな思

いがこめられているんだなあ」と私なりにタ
イトルを分類し記すことにしました。

タイトルも一つの作品であると言われ、作
者の思いはタイトルにこめられているはずで
す。それではスタートしましょう。

作品には家族を詠った内容がたくさんあり
ました。家族たちの出会いや日常を詠ったタ
イトルが次のものです。「娘の家族」「みど
りご来る」「媪」「百年生きて」「みずた
き」「曾祖母となる」「母は百までわしや
九十九までか」「老いのしあわせ」。しみじ
みと家族の温かみが伝わります。

病気になるいは戦争などによって家族との別
れを詠った内容が「父の戦死」「沙羅の花落
つ」「平和のふた文字」「逆縁の悲しみ」
「なぜか古里」「夏の採園」「去りたる夫
よ」「鎮魂の雨」「蘇生」「男めし」など
に家族を悼む思いがあふれます。

淡々と家族との交流を詠った作品が次のタ
イトルです。「母」「亡父とお酒」「夜半に
目覚めて」などがあり、やっぱり家族ってい
いなあと氣づかせてくれます。

そして家族と農業や園芸とのつながりを詠
ったのは「黄なす蝶花」です。また、やむな

く離農せざるを得ない状況を詠った「父」
「離農」「永遠のわかれ」「農業法人」は農
業問題と家族の関係を考えさせられます。

老いや闘病生活を詠った内容もあります。

「余白」「健康の有難さ知る」「冬の虹」
「天の為すこと」「花の愁い」が印象に残り
ました。寂しさと決意が見えます。

思い出の古里を詠った内容が「高野の子ど
も」「ふるさと」「折々の言霊」「村の子ど
もたち」「しあわせ」「ダムとなる村」など
で古里を失う寂しさと古里を思う懐かしさが
感じられました。

淡々と日常の景色や野鳥などを詠った内容
は「本日は幸せなり」「もじずり」「春の足
音」「故郷」「紅の花豆」「秋の風景」「自
然と人」などで自然の良さを詠います。

旅をテーマにしたたり古里の中でも特定の地
域に思いを馳せた歌を詠んだ内容は「北鎌
倉」「二荒の丘」「樺林」「男鹿の郷」「ア
イラブ秋田」「山里の春」などは地域の良さ
とふるさと愛を詠いあげます。

秋田には新しい施設ができました。そのこ
とをテーマにした歌が「ミルハスの風」「秋
田市文化会館創築へ」です。新しい施設への

わくわく感がいいですねえ。さらに「東北絆
まつり」は素敵な催しを詠っています。

時事詠としてロシアのウクライナ侵攻を詠
んだ「心でうたう」や、今の政治情勢「哀悼
安倍晋三氏」「女性議員とジェンダー」があ
げられましょう。時代を歌として残すことの
大切さに気づかれます。

日常の何気ない気持ちや趣味などを詠った
内容が「写経」「今年の夏は・・・」
「目覚める」「自分」などが淡々と自分を見
つめながら日々を生きる大切さを詠います。

最後に分類がなかなか難しいなあと感じた
のが「動物園」でした。動物の目線を通して
シニカルに世間を見つめています。社会詠と
言えるかもしれませんが。三十一音で表現する
短歌のおもしろさを感じます。

選評を読んで「そんな思いの短歌ではない
しタイトルでもない」と感じるかもしれませ
ん。そこは私の読みと分類の甘さです。ご容
赦のほどをお願いいたします。

審査を終え感じたのは皆様の短歌を詠う熱
意、短歌の奥深さそして素敵さを改めて教え
られたことです。ありがとうございました。

「かりん秋田」編集委員、秋田県歌人懇話会
常任理事



「あきたの文芸」
令和4年

山中律雄

久しぶりの選にわくわくしながら作品を読
んだが、正直物足りなかった。毎年、どのよ
うな作品が応募されているのか知らないが、
今年に限って言えば、総じて低調だった。応募
に合わせ急いで作ったのだろうな、と思わ
れるものが多く、練られた作品は少なかつ
た。

仮名遣いや送り仮名の間違い、誤字も多
く、文学賞に応募するという自覚の感じられ
ない作品も見受けられた。文法の誤りにより
歌意の通らない歌も多かったが、文法の学習
には時間を要する。じっくりと学んでいただ
きたい。ただ、誤字、仮名遣いは辞書を調べ
れば間違いなど起きないはずである。

以下、私の注目した作品について触れる。
「沙羅の花落つ」

今朝咲きし沙羅落ち続く夕つ方姉は逝きたり臥して三日目

酸素マスク外し姉の横顔が妣ははそつくりの写メール届く

亡くなった姉を悼む一連である。悲しみにおぼれることなく、思いを沈潜して歌っているのがいい。作者の詠嘆が切実なため、観念的になりやすい素材だが、歌を大事にして丁寧に詠んでいる。ただ「妣」はどうだろうか。故人であることを強調したいのだろうか、言葉に寄りかかった甘えを感じる。

「樞林」

幾百年風雪を經し樞林は靈氣のごとき静けさに満つ

樞の幹触れて思わず息をのむ樹齡あらわに鋼のごとし

樞の林の作品で、現象をよく観て作られた歌だ。「靈氣のごとき」「鋼のごとし」などは現象を写すのではなく、それを見通す視線が出ている。一首目の結句、文脈を考えると「静けさの満つ」だろう。二首目の初句は「樞の幹に」だ。定型に納めようとして、必要な助詞を削ってしまったのだろう。良き歌を揃えながら、入賞に到らなかつた原因だ。

「みどりご来る」

題名の「来る」にルビを振って「きたる」と読ませているが、「た」を送って「来たる」とすれば、ルビで題名を汚すこともなかつたろう。

触るるさへ危ふきまでのみどりごが繭籠もるごと包まれ来る

みづからのいのち確かめぬごとくもろ手頻りに虚空を握る

みどりごの様子を具体的に捉え、生き活きたとした情感がある。やや類型を感じる比喩が全体の調子を落としている。一首目、何かにくるまれて「繭籠もる」ように見えているのだろうが、その何かがはつきりしないため、歌の輪郭が曖昧になった。結句は「つつまれて来る」の方が引き締まる。全体、軽く流している感じがあり、今後は一首を厳しく仕上げる方向に努力を向けたい。

「媼」

買ひ物へゆくにも医者へ通ふにも電動カートにてゆつくりと

朝仕事なし日中はそとに出ずだれもをらざるやうなしづけさ

「媼」を歌って情感がある。作者自身も媼

のひとりなのかも知れない。とりたてて特色があるわけではないが、平明で優しい歌い口には好感がもてる。「だれもをらざるやうなしづけさ」には作者の鋭敏な感受が出ている。やや浅塗りのなので、生彩を加える工夫を考えてもらいたい。

「みずたたき」

真夏日の予報に明日は早起きし葱を植えんと目覚し掛ける

小さな日常のアクセントを歌にしている。表現力が足りない。作者の思いを読者に伝えるために表現力は大切だ。

「余白」「健康の有難さ知る」「曾祖母となる」「父」「自分」等にも注目したが、採れる歌は少なかつた。

全体、題名の付け方が安易だ。題名も作品の一部であることは指摘しておきたい。

短歌結社「運河」代表。日本文藝家協会会員。現代歌人協会会員。秋田県歌人懇話会会長。秋田魁新報読者文芸「短歌」選者。

俳句



斎藤 淳子

選に当たって

いた。最優秀賞にふさわしい作品である。

奨励賞『記念樹の桜』

病む夫にことばを探す月朧

話さねば遠のく夫や螢の夜

手を振って夫の来そうな大花野

夫を看取った哀切さを、俳句に見事に昇華

させている。3句目は、遺された妻の悲しみ

と追慕の念が混在し、身に沁みてくる。

奨励賞『夏の花』

足跡の指くつきりと夏の花

潮騒の音豊かなり夏の花

夏の日を弾く渚の真砂かな

夏の花をテーマに添って丁寧な詠み、印象

深い。一句目。浜辺に残る指が具象的で、

夏の花を写真。

奨励賞『通り土間』

蔵の町包む野づかさ花林檎

鞘蔵の破風の飾りや風光る

水打って蔵の背戸まで通り土間

花林檎の香が漂う蔵の町を包むように、野

づかが広がっている。地貌を生かした堅実な

読みぶりが、蔵の町並みを彷彿とさせる。

入選『雄和路』

噴水の音の尖りて風生まる

噴水の音が尖るといふ作者独特の捉え方。

意表を突く表現に聴覚の冴えを感じる。

入選『鱈船』

霊峰を指し鱈船帰り来る

鱈船が霊峰鳥海山を指し帰船している。

エンジン音まで聞こえて来そうな臨場感。

入選『幸せの刻』

墓参り生命線を濡らしつつ

墓参りと生命線の意外な取合わせ。単純な

構図が新鮮で印象的。

入選『魂鎮め』

木洩れ日や蟬時雨とは魂鎮め

奥処の官修墓地で、戦いで亡くなった人達

の魂を鎮めるように、蟬時雨が聞こえる。歴

史の重みを感じる、スケールの大きい作品。

入選『堰普請』

蛸や普請を告げし掲示板

秋の長雨で村に変時が起き、堰普請を告げ

る掲示板。蛸が急かせるように鳴いている。

入選『盆の月』

茄子の馬線状降水帯の下

精霊棚に飾る茄子の馬と、気象用語の線状

降水帯。取合せが斬新でインパクトがある。

入選『祭』

今回の応募作品では、郷土愛に根差した意

欲作が多く、秋田の良さを再発見し勉強にな

った。選に当たって私が心掛けたことは、

テーマに添った作品も大切であるが、諷詠の

視点や季語の働きも加味した。大切なことは

一句一句を丁寧に詠み、読み手を魅了する構

成力と完成度を目覚し、今後も「あきたの文

芸」に挑戦して頂きたい。

最優秀賞『信仰の園』

夜草刈りイエスに径を開けて置く

薫風で満ち溢れたる異人墓地

瞑想の園への小道小鳥来る

祈り終へ銀河見上ぐる修道女

一読して力量のある作者と感じた。一句一

句の完成度が高く、読み手を未知の世界に誘

っていく巧みな構成力と統一感群を抜いて

村長の祭提燈高々と

いち早く高々と祭提燈を掲げる村長。コロ

ナ禍で、三年ぶりの祭への意気込みを表出。

入選 『花火』

海鳴りの終着駅や花火果つ

海辺で打ち上げられた花火。終わったあと

の静寂さが、海鳴りの音を聴覚に取り込む。

入選 『ふるさと』

ゆびきりをして別れたる秋夕焼

再会を約束して別れたあの日。秋の夕焼が

優しく二人を包む。季語がよく働いている。

グリーン賞

真つ黒に日焼けた肌が眩しくて

俳句に向ける視線が真つ直ぐで若々しい。

詩情もある。俳句の基本の有季定型を守り、

今後も若いエネルギーを俳句に向けて欲しい。

い。

(俳誌「海」「草笛」同人。公益社団法人俳

人協会会員)



俳句の涙

片倉 俊 秀

一句の俳句に涙することがある。しかし物語の涙とは少し違う。俳句の涙は十七音がそのまま心臓を射抜くようにやって来る。生きることへの凝縮した感動と共鳴の力がある。

最優秀賞 「信仰の園」

殉教の血潮に似たる紅薔薇

薔薇香る農衣姿の修道女

薫風で満ち溢れたる異人墓地

獣道抜ければ絶景雁渡る

紅薔薇を殉教の血潮と対比、修道女の農衣姿、風薫の異人墓地、そして雁渡る姿等々。一句一句が詩として練り上げられ宗教的小宇宙の形成に成功している。感動を呼ぶ句群である。

奨励賞 「記念樹の桜」

記念樹の桜の下にありがとう

まだ読めぬ看取りの日々の古日記

凜として生きる約束石路の花

今まさに私を残し逝った夫。残されたもの

の深い悲しみや思いが表出されている。哀惜の情はつきない。

奨励賞 「夏の海」

出戸浜のみな閉め切りし海の家

引き波の轟く音や夏旺ん

夏の日を弾く渚の真砂かな

コロナ禍の影響だろうか閉め切られた海の家。引き波が轟き、渚の真砂は夏の日をいっぱい浴び輝いている。情趣豊かに夏の浜を詠っている。

奨励賞 「通り土間」

蔵の町包む野づかさ花林檎

鞆蔵の破風の飾りや風光る

水打つて蔵の背戸まで通り土間

横手市増田町は国の「重要伝統的建物群保存地区」に指定されている蔵の町である。また林檎の郷でもある。両者を一体化させ、その情景を見事に詠み上げている。

入選 「雄和路」

空の蒼露月の里は青田風

今に残された露月の里の景を詩情たつぷりと詠みあげている。

入選 「鱧船」

鱧船の漁場へと向ふエンジン音

鱧船の漁場へと向ふエンジン音

冬の海。漁場に向かうエンジン音には希望と期待が詰め込まれている。力強い一句。

入選「幸せの刻」

修道女と隣り合ふバス春の雲

修道女との出会いを春の雲と取り合わせたことで心安らぐ句になっている。

入選「魂鎮め」

奥処なる官修墓地や蟬時雨

戦争で亡くなられた兵士への鎮魂。「奥処なる」の措辞が歴史の重みを感じさせる。

入選「堰普請」

手分けして残暑の堰堰普請

出水で傷んだ堰。村人総出の普請。まだ結びの結末は残っているのだ。故郷を守る村人。

入選「盆の月」

茄子の馬線状降水帯の下

自然の前に為す術もない。「茄子の馬」と

「線状降水帯」の取り合わせが見事。

入選「祭」

村長の祭提燈高々と

三年ぶりの祭。先頭にたった村長の提灯が振られ祭りのクライマックスへ。

入選「花火」

昼花火から人波の衝動く

大曲の花火か。これから始まる一大イベントを前に街全体が高揚し揺れている。

入選「ふるさと」

ふるさとの空広々と風薫る

対象を素直にゆつたりと詠み上げている。情感豊かな一句。

グリーン賞「妹」

靴散らし響くただいま夏の夕

伸び伸びと澁刺。自由奔放な妹の姿を表出素直な描写の中に作者の感性が光る。俳句を是非このまま続けて欲しい。

秋田県現代俳句協会副会長・幹事長



簡潔こと力

佐々木 公平

俳句の特徴は、その短さにあり、わずかに十七音しかないというところは、何かを説明しようとするれば、ほとんど何にもいえず終わってしまうということを意味しています。

そこで俳句を作る際には、語ろうとしない

こと、説明しないことを心がける必要があります。

一言でいえば、述べるのではなく描くこと、文章よりは絵画に近いということになります。

最優秀賞「信仰の園」

殉教の血潮に似たる紅薔薇

薔薇香る農衣姿の修道女

瞑想の園への小道小鳥来る

祈り終へ銀河見上ぐる修道女

何よりも安定感があり、タイトルに添い好感。一句一句にメリハリがあり、良く推敲された連作に長けた作者である。

奨励賞「記念樹の桜」

記念樹の桜の下にありがとう

話さねば遠のく夫や螢の夜

凜として生きる約束石路の花

病む夫を最後まで看取る日常を、素直な気持ちで描いてをり、季語も照応している。

奨励賞「夏の海」

引き波の轟く音や夏旺ん

潮騒の音豊かなり夏の海

夏の日を弾く渚の真砂かな

夏の海だけを詠んだ一連の句だが、夏の陽

光に満ちあふれた日本海、気分爽快です。
奨励賞「通り土間」

鞘藏の破風の飾りや風光る

水打つて蔵の背戸まで通り土間

爽やかや蔵に栄華の鍔絵紋

漆喰の土蔵や鍔絵など、今に残る町並みの
増田、映画のセットのような雰囲気があります。

入選「雄和路」

青嵐抗一本の渡しあと

入選「鱈船」

霊峰を目指し鱈船帰り来る

入選「幸せの刻」

修道女システマと隣り合ふバス春の雲

入選「魂鎮め」

奥処なる官修墓地や蟬時雨

入選「堰普請」

秋霖や溢れし堰の暴れ渦

入選「盆の月」

雨雲の部厚く覆う盆の月

入選「祭」

男衆の破れ声神輿滝に入る

入選「花火」

昼花火から人波の衝動く

入選「ふるさと」

ふるさとの空広々と風薫る

秋田県俳句怨話会会長

(兼) 会計幹事

俳誌「青嶺」同人

川柳



主題と連

宮腰 流木

川柳には謎解きの面白さが有る。現在、暗喩の時代といわれますが比喩をどう読み取ることが問われます。読み手の領きと共感をいざなうものであれば楽しくなります。

秋田の川柳界も高齢化、今回の応募者を見ると六十代以上が八割、七十代が多い事でした。若い人の応募は最近無かったのですが今回、十代の参加があったことは嬉しい事です。十七音字、句の作法を身につけ、座の五

を磨いて次回を期待したいものです。

作品の傾向としては、夫婦親子など家族関係、老いと病、生活への夢、想い出と希望、時事などがありました。

連作には題があります、題がある限り題を明確に読み込んでいるかが問われます。七句を並べその中の一句から撮んだような題はいただけません。題が七句の構成に合っているかです。連作は初句と終わりの句で決まると言われます。それは七句の起と結でもあり、二から六句の承と転に連があるかで決まります。

作者は、経験豊富ですから多様な視点での作を試みていることがわかりますが、訴えるものがあるか、視点が常套的でないか、表現が分かりやすいかを見られます。

また、「省略が秀句を生む」といわれますが新三要素逆転・転写・移動にこだわりすぎると素材がマイナスに省略されて意味が冗漫だったり核心をついていない意味のない句になつてしまいます。わかりやすい余韻と省略、詩性と連を大切にしたいものです。以上が感想です。

○いい眠り

初句で話題を提示して中五句の連でいい眠りの意がよくわかる構成です。何よりも読むほどにわかりやすく頷ける良さ。

○一粒の種

句の流れ（配置）の良さが共感を呼びます。句全体に明るさがありリズムの良さと思う。体言止めの多いのも句全体の安定感をもたらしたと思う。

○恋の数式

着想は平易だが表現において巧みさが見える題を着実に詠みこんで読み手にわかりやすい。初句で興味を呼び、中の句の連で明るさを添えて七句目で答をだす面白さがある。

○愛の果て

阿吽の吽は一切の帰着する知徳、話す相手のいない吸気です。とかく暗くながちな事象を作者は銜いなく述べる川柳らしさを感じる。しかし、想い出を糧として月日が生きる力を与えてくれる。（気づかない間にクスツと）全句をとうして詩性と連があり明るく結

んでいるので共感を呼びます。

○父の横座

父の背を見て育った男の句。

生き様を中の句で詠みあげた連が効いています。終句で答をだす見事です。

○再生への道

句全体に比喻の配分がよく効いています。題との整合がよく未練から再起の気持ちが良い理解出来ます。再生紙の比喻が句全体を引き締めました。

○黄昏

身の回りの事象、誰しもがわかることで黄昏たくないことを黄昏と軽く詠んだのが頷ける。たしかに、暮らしの中でつぶやくことが川柳になる見本の作品と見た。

作品の中には一句だけ見ると佳句がありました。連作としては次の方々に期待しました。

○夢のかけら ○雲の行方

○和やかな日々 ○ふる里の再生

○生かされて



一日一句
そして推敲を

柴田政幸

川柳あきた吟社主幹

私が川柳を作る時の心構えの第一は「一日一句。そして推敲を。」です。その推敲をする時「辞書」が絶対に必要です。例えば「うた」は、歌・唄・詩の三つの漢字があります。「うたう」には、歌う・詠う・唄う・謡う・唱う・謳うの六つの漢字があります。その中から、自分の川柳に一番適した漢字を選ばないといけません。字数は同じでも漢字の違いで、自分の感情や考えを素直に表現した川柳が、違った句になったりします。川柳は、紙と筆記用具を持てば誰にでもできる大衆文芸ですが、推敲の作業が絶対に必要であり大切なことです。

今年も、昨年に続いて多くの作品にお会いすることが出来て嬉しく思っています。特に今年は、川柳部門に十代の方が久々に参加され大きな喜びを感じています。今後この傾向

が継続することを念願しています。

最優秀賞 いい眠り

- ・ぬるま湯に浸かる男の曲がり角
 - ・左遷地で迎えてくれた義理人情
 - ・八起目が掴んだボクの現在地
 - ・夢を見る赤子を抱いたい眠り
- 平易な言葉で、男の心情を素直に表現しています。現役の力強いエネルギーを感じます。七句に一貫したものがあがり、最後の句に、作句者の思いを充分に感じることが出来ます。

奨励賞 一粒の種

- ・一粒の種が夢見る青い空
 - ・するすると豆の木のぼる子等の夢
 - ・人ひとり泣いて笑ってみな花野
- 優しさと美しさが交錯している句で構成されています。前向きな明るい句に、心が揺れ動かされます。

奨励賞 恋の数式

- ・又とない恋を宿した雨宿り
 - ・友達の括りで返る愛の壁
 - ・定理さえ解けて解けない恋の式
- 恋を実に見事に詠っています。最後の句

は、川柳でないとは表現出来ない十七文字で構成されています。

奨励賞 愛の果て

- ・雨の午後温い思い出だけ偲ぶ
 - ・気がつけばクスツと笑う日が増える
 - ・赤い糸下りてきそうな星月夜
- 悲しみを乗り越え、前向きに生きていこうとする素直な心と力強さを感じます。

入選 父の横座

- ・死に場所と決めた男の活火山
 - ・下絵には父の横座があつた筈
- 男の人生観を淡々と詠っているところが、私の琴線に触れ強く感性が揺さぶられました。

入選 再生へのみち

- ・土捏ねて捏ねて再起の登り窯
 - ・憧れの空へひこばえ真つ直ぐに
- 過去を捨て去り新たな目標に向かう心情が、全ての句から感じ取られます。

入選 黄昏

- ・先に逝く話になると譲らない
 - ・無言劇先に笑った方の勝ち
- 長年連れ添った夫婦の心情を見事に詠っています。

結びに、入選に今一步の方の作品から心に残った句を紹介します。

雑草の唄

- ・炎天に堪えた雑草根が太い
- ・夢のかけら
- ・厚化粧鏡の中にある都会
- ・ふる里の再生
- ・ふる里のいのち削って過疎となる
- ・和やかな日々

悔いは無い笑顔やか盃蘭盆会

祈り

- ・初ほたる夢を託した蚊帳のなか
- ・ふあうすと川柳社同人
- ・ふるしろ川柳会主宰



自分のスタイルで

藤 咲子

四年ぶりに選考委員を務めることになり、少し緊張感をもって三九編の応募作品と対峙いたしました。

三九編とは以前からすると大分少なくなっ

たなあと思えました。三九作品を誤字、脱字、助詞の使い方が不適切なものなどはマイナス要素となるので省きました。

選考会議では、選者三名が一枚一枚に点数を付して提出し、合点の高点者からそれぞれ、最優秀賞一名、奨励賞三名、入選三名を選出いたしました。

こうした中で、自分のスタイルで、人間模様を中心に詠んだ作品が上位を占めたように思います。

最優秀賞 「いい眠り」

- ・ぬるま湯に浸かる男の曲がり角
 - ・車座の対話ところが丸くなる
 - ・七人の敵に学んだ人生訓
 - ・夢を見る赤子を抱いたい眠り
- 選者三人から高点を得て、すんなり最優秀賞に決定しました。

題名と作品の内容が整っていて、作者の心の広さを感じました。

奨励賞 「一粒の種」

- ・一粒の種が夢見る青い空
 - ・輪になって笑顔で歌う里の秋
 - ・人ひとり泣いて笑ってみな花野
- 一粒の種に希望を託しています。簡単な言

葉で故郷、子供の頃を表現していると感じました。

奨励賞 「恋の数式」

- ・曙光に新たな出会い呼ぶ予感
 - ・又とない恋を宿した雨宿り
 - ・定理さえ解けて解けない恋の式
- 恋の告白のむずかしさを見事に語っています。告白、妹を頼むなど、かた苦しくない句になっています。
- 奨励賞 「愛の果て」

- ・夫逝き阿吽の吽を持て余す
 - ・独り居の平気よそおう親心
 - ・気がつけばクスツと笑う日が増える
- さわやかで肩の凝らない作品が、なんとも言えない。希望が見えている作風であると感じられました。

入選 「父の横座」

- ・鬼門抜け僕の時代を手に入れる
 - ・飯うまいまだまだ道は譲らない
- 家庭内の事だと思えますが、男の強さを良く出ている気がします。
- 入選 「再生へのみち」
- ・憧れの空へひこばえ真つ直ぐに
 - ・不束を包んでくれた日溜まりよ

簡単な言葉を使いながら、芯のある句だと思えました。推敲をしているのがなんとなく、感じられます。再生への意欲がよく出ています。

入選 「黄昏」

- ・先に逝く話になると譲らない
 - ・看る方も看られる方も要る我慢
- いま問題化している「介護」をテーマにしている句と思いい、また一定の勢いが感じられる作品と思われれます。

川柳銀の笛吟社副主幹

エッセイ

希望のいろ



柴山芳隆

今回は四編が奨励賞を受賞したが、そのうち「夜のしじま」は、エッセイの本質にか

なつた作品だと評価できる。一定の年齢に達した人の心の動きが、肩肘張らずに綴られていて、読者の心に沁みてくる。末尾に希望のいろが見える点も好ましかった。「竹の子」は、団塊世代の今の一端を偲ばせてくれる。この世代は誕生した当初からさまざまな意味で話題になり時には問題にもなってきたが、多くが後期高齢の域に達した現在、どのように日々を送っているかということを見せられてくれ、そういう意味ではトレンドイナ作品になっていく。登場人物のほとんどがインシャル表記となっている点はやや煩わしいので、ここは改善が必要である。「小さな旅」心の色を微笑みに」は、伯母を初めとする先人への思いがよく出ている。文中に挿入された短歌も効果的である。文題のうち、副題の部分は不要であろう。「栗の花」には、今は失われてしまった小学校のかつての生き生きとした日々が描かれていて懐かしさの感情が刺激される。昭和は遠くなりにはけりである。基本的には思い出話だけで終わっている印象なので、もう少し文学的な味つけがあればと思った。

グリーン賞に輝いた「感じて生きる」は、

看護師をめざして勉強中の大学生を描いた作品である。人生と真摯に向き合っている姿勢が好ましい。めざす職業に関して若いなりによく考えている。こんな若者がいることに頼もしさを感じた。表現や表記はいまだしだが、それらは書き続けていけば上達してくる。今後の一層の精進に期待している。

惜しくも賞は逸したが、印象に残る作品も少なくなかった。「あじさいが彩る街」は、あじさいが咲く頃の雰囲気がよく出た作品である。アジサイの表記が漢字とひらがなの両方になっているが、使い分けの基準がはっきりしない。「俄か主夫奮闘記」は、眼を手術した妻に代わって家事に精を出す夫の姿を描いた作品。ユーモラスな要素は評価できるが、もう少し深みがあればと思う。落語の三遊亭圓朝を偲ぶ「宿を立ち出で ながむれば」にはシニア世代の女性の感慨も良く出ているが、どの部分を一番書きたかったのかはつきりせず、その分焦点ボケになっている。文題の意図もイマイチ不明瞭である。夫および夫の父親のそれぞれの単身赴任に想いを馳せたのが「単身赴任」である。妻の立場、嫁の立場からの視点はよいが、ややひとりよが

りの感なきにしもあらずである。男はそんなに単純ではない。田沢湖への観光客数の減少を憂えるところから出発した「田沢湖の今後」は、頭で書いた部分が勝ちすぎている印象である。もう少しところで書いた部分があれば作者の思いも読み手に伝わるだろう。誕生日を一日遅れにして登録されたしまった経緯を綴った「生きた痕跡」を読むと、お役所仕事というのはいふんご都合主義であったことがよく分かる。もしかして現代にもそうした風潮があるのでなかろうかとふと疑問を抱かせる要素を内包している。

着眼点がおもしろいと感心したのは「西暦和暦年齢早見表」である。わらび座に対する思いはよく出ているが、単なる思い出話に終わっているのは残念。挿入されている座歌は印象的であった。コロナ禍の中でバリ島を訪れた経緯を紹介した「バリのライステラス」は、あれこれ自粛を強いられて籠りがちな人々の気持ちを、つかの間、解放してくれる。ただ、これまた思い出話で終わってしまっているとの印象を拭い難いところがある。手書きの原稿のせいか、表記面の不備も気になった。「木槿」も表記云々は同様だが、

八六歳で「あきたの文芸」に挑戦した心意気は諒としたい。文芸創作活動に定年はないことを証明してくれたような一文である。

ほかにも触れたい作品はあるが、残念ながらここで紙数が尽きた。



選考後の感想

武田 幹夫

多様な自由さがあるエッセイですが、選考会議に臨むにあたり主題と構成それに表記を自分の基準としました。会議では題名の適否も話題になりました。

主題についてですが、読者に共感してほしいことを明示あるいは暗示してほしいと思います。エッセイは自由に書いてもよいとはいえ、素材を並べるだけでは記録文や報告文になってしまいます。軸となる思考をもち、複数の素材を文学作品としてまとめあげてほしいと思います。

構成については、素材が効果的に結びつき文学として完結させることが大切と思ひ

ます。主題が明確でないために着地点が見えず構成に難儀していると感じる作品もありました。

表記に関しては「正書法が確立していないから自由に書いてもよい」ということで迷うことがあります。公用文や教科書には基準があるものの、制限するものではなく目安なので迷いは解消されません。コンピュータやスマートフォンで文字画面では自由な独特な記述があり、ますます迷います。漢字で書けばよいのか、仮名で書けばよいのか、どの漢字を使えばよいのか、加えて、句読点の要不要、段落の処理、さらには「『』?!」などの記号にかかわる扱い方などで悩むことはいでしょうか。応募原稿に気になるところがたくさんあります。少しだけ述べます。常用漢字以外はルビつきにするのはいかがでしょう。生徒・学生を含め多くの日本人は常用漢字を標準とする教育を受けています。読者が漢字を読めずに内容が理解できなければ、執筆者にとつても読者にとつても残念なことです。記号やスペース（空白）の使い方については、標準とされるものを確認し、个性的にすることの是非を考えてみてください。公募

原稿の表記であることを念頭に置いて、ご一考願えればと思います。

「小さな旅」心の色を微笑みに」伯母を思う気持ちが静寂のなかで重なりながら伝わってきます。散文と韻文が溶け合い、詩情豊かに描かれています。文章の焦点を見定めようとする視線も感じ、安心して読めます。

「栗の花」事実を淡々と述べながら生活するうえで大切なものを見つめています。やさしい心で故郷を慕い、ささやかでも守るべきものがあるという信念が行間に流れています。主題にそってペンを進めています。

「竹の子」友情を深め合う様子が丁寧に述べられています。下地には団塊の世代を生き抜いてきた苦労があると推察されます。過去の苦労を共有し、竹の子汁会に熱中している楽しそうな姿に昭和生まれの悲哀を感じます。

「夜のしじま」夜の室内のしじまから始まり、農道を自転車で行くという時間の流れに心の風景と自然の風景を一体化させています。連続する描写も末一色までの覚悟に集約されていき、構成の意図を読み取ることができます。

「公園で想う 親とは」身近な鳥を気づきの発端とし、スズメの情景では親の付加された愛情ではなく根源としての親の愛情を考えています。続けて人間の親へと思考を昇華させていき構成が明確です。

「カエルと風呂桶」夫婦の愛が行間にあり、ささやかな出来事を、さわやかな文章に仕上げられています。笑えない話題ですが、ユーモアが漂い、物語としてのおもしろさがあります。ユーモアと滑稽との境は難しいものだと感じました。

「感じて生きる」過去には深刻な問題もありましたが、克服して光を見ようとする意志が奥底に感じられます。自分の心を基礎としつつ周囲も広く観察して思考し、世の中の光を主題とするような作品を期待します。



審査報告

中村 寿

エッセイ部門は最優秀賞が該当無、奨励賞が四作という結果になりました。

審査員は受賞候補作を事前に準備し、審査会に臨みます。三人の事前審査結果は、受賞対象にならない作品については一致しました。一方で、受賞作については一致していませんでした。最優秀賞は誰が読んでも優れていると評価されるエッセイに授与されるべきでしょう。このような審査方針から、審査員は最優秀賞の推薦を見送りました。投稿者の皆様には大変心苦しく思っていますが、どうぞ事情についてご理解ください。

以下、奨励賞四作の概要と受賞理由についてご報告いたします。

①奨励賞「栗の花」

本作では、のどかな村の書き手から自身の幼年時代の記憶が語られていきます。現在と過去をつなぐ橋渡しの役目を果たすのは、嗅覚、「栗の花の匂い」です。「昭和後期の山あいの小さな小学校」の描写からは、書き手が幸せな子供時代を過ごされたであろうことがわかります。対照的に、現代は「過疎の村」。この対比から、評者は人口減によるほの暗い未来を予感させられました。本作は、農村の持続性といった観点から、社会への問題提起の側面も持ち合わせています。

②奨励賞「竹の子」

森吉山高原キャンプ場に七人の女性男性が集まります。彼らは昭和二十四年度生まれ、いわゆる「団塊の世代」に属します。一年に一度、彼らはそこで芋煮ならぬ「竹の子汁」会を開催し、再会を喜び合います。明るい文章の背後からは、これまでの人生の紆余曲折もうかがわれます。昭和五十二年生まれの評者にとっては、自身の親と同じ年代に当たる方からの投稿作です。仲間たちの数十年にわたる変わらぬ友情は、初夏の草原をわたる爽やかな風のように、評者の胸を通り過ぎていきました。

③奨励賞「小さな旅」

書き手は亡き伯母の嫁ぎ先である男鹿・北浦の旧家へと「小さな旅」をします。伯母を偲ぶ旅です。作中には、それがようやく叶ったとありますから、書き手はその機会をずっと待つておられたのでしょう。伯母は農業に励みながら、家政を管理し、その傍らに短歌を詠み、その才は男鹿の文化賞によって顕彰されました。旅の途中で、書き手は故人にならって自ら歌を詠みます。歌詠みの紀行文は、西行をはじめとする日本の紀行文の系

譜に連なるものだと云えます。

④奨励賞「夜のしじまで」

家族が寝静まった深夜、書き手は独り床を出て、自分自身との対話を始めます。本作はその結果生まれた自身の内面の記録とも言えます。配偶者とのズレ、子育てへの反省、亡き家族への想い。アンネ・フランクは「紙は人間よりも我慢強い」と書いています。紙は人間と異なり、反論をしないというくらいの意味です。書くことには癒しの効果もあります。本作を書くことによつて、書き手は癒しを感じられましたでしょうか？

その他、残念ながら受賞対象にはなりませんでしたが、印象に残った作品を挙げておきます。

「カエルと風呂桶」。農作業の合間、カエルをめぐつて始まる夫婦の会話。夫婦協力しながらの農作業に、夫婦間の愛情を感じました。

「アイドル・森高」。一ファンによる森高千里への想いがストリートに伝わってきました。

「西暦和暦年齢早見表」。かつて「わらび座」の劇団員をされていた方からの投稿作で

す。当時、劇団員同士が結婚する際には、劇団がこぞつて祝福をしてくれたそうです。若い方はこうした時代があったことを知りませぬ。どうぞ投稿を続けて、時代の語り部となつてください。

最後に「感じて生きる」。若い看護学生からの投稿作で、グリーン賞の対象作です。最近は何を始めるにしても、それに必要な労力にふさわしい見返りがあるかどうか、損得で判断するようになってしまった。この打算が大人の賢さであり、ずるさであるのかもしれない。大人になることへのためらいが感じられました。

「あきたの文芸」第55集応募状況

1 部門別（応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
R4年度	9	32	61	77	39	24	242
R3年度	14	38	55	78	45	25	255
R2年度	10	41	63	91	54	25	284
R元年度	10	40	60	77	47	21	255
H30年度	12	36	51	98	47	23	267

2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳		エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
R4年度	7	2	13	19	24	37	39	38	25	14	12	12	120	122
R3年度	9	5	13	25	20	35	44	34	31	14	13	12	130	125
R2年度	7	3	10	31	23	40	51	40	37	17	16	9	144	140
R元年度	6	4	14	26	26	34	42	35	30	17	13	8	131	124
H30年度	7	5	14	22	23	28	57	41	27	20	9	14	137	130

3 年代別

	総数	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
R4年度	242	18	4	2	8	13	44	85	63	5	0
R3年度	255	11	6	3	10	21	51	77	68	7	1
R2年度	284	22	6	3	10	18	51	98	69	7	0
R元年度	255	20	4	1	10	23	49	89	55	4	0
H30年度	267	10	4	7	8	21	49	91	74	3	0

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
小説・評論	1	1	0	0	1	4	1	1	0	0
詩	9	0	0	2	5	5	7	4	0	0
短歌	3	1	0	2	1	8	21	24	1	0
俳句	4	1	2	2	4	13	29	19	3	0
川柳	1	0	0	1	0	5	20	11	1	0
エッセイ	0	1	0	1	2	9	7	4	0	0

4 新旧割合（作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	5	24	43	57	30	16	175
新	4	8	18	20	9	8	67
計	9	32	61	77	39	24	242

再…以前にも応募したことがある方
 新…今回初めて応募された方

5 月別応募数

6月	7月	8月	計
22	32	188	242

あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第五十四集（令和三年度）応募二百五十五作品

・小説・評論部門

・詩部門

・短歌部門

・俳句部門

・川柳部門

・エッセイ部門

奨励賞	坂本愛子	「東禍流」
奨励賞	高橋岑夫	「種を蒔く」
奨励賞	工藤美咲	「夜明け前」
奨励賞	田口夏音	「ノー・タイトル」
奨励賞	霜月楓	「フィクションが救い得る世界について」
奨励賞	浅利駿斗	「人生の栄養」
最優秀賞	加藤一弥	「集団移転」
奨励賞	工藤美咲	「赤の他人」
奨励賞	浅利繁雄	「農にいそしむ」
奨励賞	箕浦宮子	「おかげに生かざる」
最優秀賞	石郷岡由紀	「宝蔵寺にて」
奨励賞	佐々木成	「菩提寺」
奨励賞	三浦静佳	「父の時計」
奨励賞	浅田英夫	「少年」
最優秀賞	佐藤啓子	「大志を拓く」
奨励賞	山崎如酔	「幸せの住処」
奨励賞	大嶋久利	「凡人」
奨励賞	佐藤明子	「螢草」
最優秀賞	小松紀子	「北海道生まれのパンダ」豆
奨励賞	摂津肇	「父のこと」
奨励賞	渡辺澄子	「じいさんばあさん」
奨励賞	春野昌和	「銀杏並木の画廊」

編集後記

◎令和四年度あきた県民文化芸術祭2022
「あきたの文芸」入賞作品集『あきたの文芸
第五十五集』を刊行しました。

この作品集は、十六歳から九十六歳までの
応募作品二百四十二編より、最優秀賞四編、
奨励賞十七編、入選二十二編、二十五歳以下
の文芸活動を応援するグリーン賞八編、計
五十一編を掲載しております。

◎この事業は、あきた県民文化芸術祭2022
の一環として実施しております。応募いただ
いた皆様をはじめ、文芸団体や広報協力をし
てくださった各市町村、報道機関、図書館な
どの文化施設、さらには、事前審査から選
考・校正まで多大なる御協力をいただいた選
考委員の皆様には深く感謝申し上げます。

◎「あきたの文芸」は、今後もより読みやすく
親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、
一層充実させていきたいと思っております。

あきたの文芸第五十五集

あきた県民文化芸術祭2022

「あきたの文芸」入賞作品集

令和四年十一月十日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話〇一八一八六〇一―一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

印刷・製本 株式会社大潟印刷

たくさんのご応募 ありがとうございます！

応募総数 242 作品

入賞 43 作品

小説・評論	1 編
詩	7 編
短歌	11 作品 77 首
俳句	13 作品 91 句
川柳	7 作品 49 句
エッセイ	4 編

グリーン賞 8 作品

小説・評論	詩	短歌	俳句	エッセイ
-------	---	----	----	------



ブンカ DE ゲンキ
はこちらから！



あきた県民
文化芸術祭
2022

あきたの文芸 第 55 集
入賞作品集
令和 4 年 11 月
発行・秋田県(非売品)